



蘭使日本紀行

二

ル 3  
1140  
2



ル 3  
1138  
卷 15

ル 3  
1140  
卷 2



○此笑フヘク。兎戯ニ似タルノ文ハ。看ル者嘔スヘ  
シ。一々信スルニ足ル者ナシ。故ニ余之ヲ取ラス。  
盖シ全文總テ虚言ナレハナリ。其始ニ於テジヤ  
パンヲ日本語ニテハニツポント言フトスレバニ  
ホント言フ者アレバニツポント書記スル者ナシ。  
又支那ヲ日本ノ東トスルハ何ノ故ソヤ。西ナル  
ヲ確然タリ。又支那境日本ト相距ルヲ六十里ト  
スルハ支那ノ何港ヨリ算スルヤ。其更ニ遠隔ナ  
ルヲ知ルヘシ。亜瑪港ハ何ノ年月ニ航海シテ。此  
距離ヲ知ル者アリシヤ。無証ノ説ナリ。又日本ハ

大海アリテ南岸ヲ隔ツトスルハ日本ノ何地ヲ  
何地ニ對スルヲ知ラサルヲ其何ノ地ニ對スル  
ヲ知ラスシテ唯臆測ニ出ルヤ抑モ日本ノ南ニ  
ハハナキシマ<sup>レ</sup>キユイオガランテ<sup>レ</sup>台湾小呂宋諸島  
インド<sup>レ</sup>シンドナオ<sup>レ</sup>ボルネオ<sup>レ</sup>セレス<sup>レ</sup>モリユキセ及他國ア  
リ更ニ無教ノ海岸アリテ日本南海ノ彼此ニ散  
在スルカ故ニ日々諸國ノ船舶往復スル所ナリ  
允ソウシク地理學ヲ講習スル者誰カ之ヲ知ラ  
サランヤ日本ノ最大島九州及四國ニ分テ六  
十六州トナシ各々首府アリフランスカロン日本ニ

在テ記録スル所ハ近來ノ歴史中ニ採用スル所  
ナリ

全國諸候

六此國ノ富強ハ日本諸候及諸王所領ノ金石總額  
ヲ以テ知ルヘシ歲入日本法ニ依テ石ニテ算ス  
一石ハ十カロリユスギユルデンニ當ル將軍ニ亞  
テ最大歲入アルハ  
加賀越中能登ノ太守加賀中納言ナリ加賀ニ往  
ス年々収納スル所百二十萬石  
駿河大納言駿河遠江三河ノ太守ナリ府中ニ住  
ス

尾張大納言。尾張美濃ノ太守ナリ。名古屋ニ住ス。  
共ニ年々収納スル所七十萬石。  
仙臺中納言。政宗ハ奥州ノ太守ナリ。仙臺ニ住ス。  
六十四萬石。

薩摩中納言。薩摩大隅日向琉球ノ太守ナリ。鹿児島  
島ニ住ス。年々六十萬石。

紀伊大納言。紀伊伊勢ノ太守ナリ。和歌山ニ住ス。  
五十五萬石。

加藤肥後守。肥後熊本ニ住ス。松平イノノスユシユン  
キヒンヘウコサ松平伊豫守。越前オエーデ皆殆ント同

高ナリ。

奥州會津ノ加藤キボ候。備後ノ朝比奈但馬守オ  
キニ住ス。各四十萬石。

松平長門守。周防萩ニ住ス。水戸中納言。常陸水戸  
ニ住ス。鍋島信濃守。肥前口ギオニスニ住ス。松平  
新太郎。因幡伯耆ヲ領ス。高濱ニ住ス。共ニ年々三  
十萬石以上ナリ。

伊賀伊勢ノ太守。藤堂和泉守ハ津ニ住ス。松平口  
ニユイ備前岡山ニ住ス。井伊掃部。近江澤山ニ住ス。  
細川越中守。豊前小倉ニ住ス。上杉彈正。越後ガニ

サワニ住ス。松平テシリヨウ。赤越後ホルマント  
ニ住ス。皆上ト殆ント同高ナリ。

③又松平阿波守ハ。阿波イシクツニアリ。松平越後  
守ハ。高田ニアリ。松平中將ハ。松山ニアリ。共ニ三  
十五萬石ナリ。筑後ノ有馬玄蕃頭ハ。久留米ニア  
リ。十萬石ヲ減ス。

森美作守ハ。美作津山ニアリ。鳥居伊賀守ハ。出羽  
山形ニアリ。松平土佐守ハ。徳島ニアリ。佐竹右京  
ハ。出羽秋田ニアリ。松平下總守ハ。館林ニアリ。共  
ニ二十萬石ヲ領ス。堀尾山城守ハ。出雲マスガイ

ツニアリ。生駒壹岐守ハ。讃岐コクワムニアリ。十  
八萬石。

宮内ハワレハク述  
ニアリ。各十五萬石ヲ  
領ス。  
寺沢志摩守ハ肥  
前唐津ニアリ。京  
極△

本多甲斐守ハ。播摩タイノニアリ。酒井。若狹守ハ。  
若狹小濱ニアリ。堀丹後守ハ。越前カワシマニア  
リ。シンシャウ兵庫ハ。備後福山ニアリ。榊原式部ハ。  
上野立石ニアリ。各十二萬石ヲ領ス。  
松平河内守ハ。森名ニアリ。奥平美作守ハ。下野宇  
津宮ニアリ。真田伊豆守ハ。信濃コスケニアリ。立  
花飛騨守。筑後柳河ニアリ。各十萬石ヲ領ス。  
小笠原右近ハ。播摩カイニスニアリ。インダチホウ

トミハ板島ニアリ。南保信濃ハ奥州森山ニアリ。  
丹羽五郎左衛門ハ奥州白河ニアリ。各十萬石未  
満ナリ。

阿部備中守ハ武藏岩槻ニアリ。八萬石ヲ領ス。  
京極宗女ハ丹後田邊ニアリ。牧野駿河ハ越後リ  
ンガレカニアリ。中川内膳ハ豊後南郷ニアリ。松  
平玄蕃ハ信濃松本ニアリ。内藤左馬ハ常陸イワ  
シコニアリ。各七萬石。  
池田備中ハ備中松山ニアリ。松浦肥前守ハ肥前  
平戸ニアリ。是往時東印土商會ノ長崎ニ移ル前

ニ商館ヲ置キシ所ナリ。各六萬石。京極周防ハ信  
濃上田ニアリ。カタセワドハ江州大津ニアリ。戸  
澤右京ハ出羽シロニアリ。松平石見ハ播摩  
ビソシゴリニアリ。松浦豊後ハ肥前島原ニアリ。  
石川主殿ハ豊後日田ニアリ。津輕越中ハ奥州津  
輕ニアリ。小笠原信濃ハ播摩セカイスニアリ。  
又伊東修理ハ豊後オラシニアリ。堀田周防ハ  
石見ダイシロニアリ。脇坂淡路ハ信濃イノウエ  
アリ。土岐長門ハヨ一鳥羽ニアリ。有馬左衛門亮  
ハニワカウアコウダニアリ。太田周防ハ大和才

ウダニアリ。松平出羽ハ越前大野ニアリ。溝口伯  
耆ハ越後新食田ニアリ。稻葉民部ハ豊後オウス  
チロニアリ。黒田甲斐守ハ信濃小室ニアリ。松平  
周防守ハ和泉岸和田ニアリ。本多左門ハ周防守  
ニ任シ。尼ヶ寄ニアリ。一柳監物ハ伊勢カンゴウ  
ニアリ。本多伊勢守ハ三河岡崎ニアリ。松平山城  
ハ丹波笹山ニアリ。毛利甲斐守ハイガヨロ  
ウサダニアリ。本多能登守ハ播摩姫路ニアリ。ア  
コトシヨウノスケハ常陸シコンドニアリ。浅野  
采女ハシオネカサノニアリ。内藤紀伊守ハシオ

ネアカンダテニアリ。加藤式部ハ奥州會津ニア  
リ。相馬大膳正ハ奥州相馬ニアリ。本多大和ハ但  
馬出石ニアリ。大久保長門ハ美濃加納ニアリ。内  
藤豊前ハ出羽ヨダテニアリ。皆五萬石ナリ。  
此諸候ノ行装極テ華美ナリ。短外套ヲ着ス。袖頗  
ル。澗シ。外套ニハ金銀糸ノ縫落アリ。外套ノ下ニ  
着服ス。帯ニテ締ヌ。帯ニ劍ヲ挿ヌ。其袴ハ澗ク。左  
右運歩ニ妨ナシ。低テ足ニ接ヌ。袴ノ紐ノ上ニ紋  
アリ。

益又次ニ記スル諸公ハ年々四萬石ヲ領ス。則チ稻

葉淡路ハ丹波福智山ニアリ。亀井デイリキハ石見最上ニアリ。片桐出雲ハ大和龍田ニアリ。本多飛騨守ハ越前丸岡ニアリ。板倉周防守ハ京都所司代ナリ。山城ヨリ四萬石ヲ領ス。又松平豊後ハ石見中島ニアリ。本多内記ハ播摩姫路ニアリ。松平丹後ハ奥州シユケイニアリ。金森出雲ハ飛騨大森ニアリ。京極修理ハ丹後田邊ニアリ。皆同高ナリ。三萬石ヲ領スルハ太田ギウエ美濃一之臺ニアリ。松平右近播摩赤穂ニアリ。水谷壹岐守上野シ

ノタインスニアリ。今坂甲斐守備中成瀬ニアリ。松平大和越前勝山ニアリ。稻生周防ハ上野アンナニアリ。松平主殿ハ三河吉田ニアリ。秋月長門ハニコリスミニアリ。諏訪因幡ハ信濃諏訪ニアリ。保科兵庫ハ信濃高洲ニアリ。菅沼織部ハ近江膳所ニアリ。島津右馬亮ハニコト三田原ニアリ。本下衛門ハ豊後ヒンスニアリ。宗對馬ハ對馬島ノ太寺ナリ。近藤信濃ハトシガオカデニアリ。本多下總ハ三河西尾ニアリ。高力振津守ハ三河濱松ニアリ。新庄駿河ハ常陸土浦ニアリ。佐久間



肥前ハ信濃イラヤマニアリ。戸田對馬ハ美濃金山ニアリ。本多和泉ハ常陸皆川ニアリ。徳川土佐ハ備中ニカイヌニアリ。松平土佐ハ越前コノマタニアリ。

次ニ記スル諸公ハ各二萬石ヲ領ス。則チ杉原伯耆常陸オノゴリニアリ。木下宮内備中コウロシニアリ。松平コイセロ播摩ハリマニアリ。稻坂撰津寺大阪城代ナリ。松平監物丹波龜山ニアリ。松崎ハ奥州三本松ニアリ。大村民部肥前ダイマツニアリ。松平和泉ハ美濃岩村ニアリ。松平紀伊守

撰津ハイクトリニアリ。シンシヤウ隼人三河コリアニアリ。内藤帯カハシオノイソイホウニアリ。小笠原若狭下總尉宿ニアリ。土方掃部シヨウノマワサニアリ。磐城四良次シヨウノ出浦ニアリ。六郷兵庫出羽ヒユリニアリ。竹中糸女豊後府内ニアリ。毛利伊勢守豊後オウナシニアリ。分部左京遠江大溝ニアリ。市橋市正コシオスニアリ。近傍ノ小島ヲ領スル諸公ハ相良左兵衛堀美作各二萬石。素山左門細井玄蕃保科大膳松平大膳五島ワイヌ五島ヲ領ス。平戸片桐石見福島越後

小堀トモヲ高田主水三宅越後酒井右近織田石  
見ナシウ振津各一萬五千石太田原備前外山ギ  
オ平岡儀右衛門大關衛門ハイシンゴウワスキ  
ボン織田丹後日野織部阿部振津守オタナモウ  
ソイス前田大和立花左近建部三五良皆川シナ  
モハネヤイジヨウ出羽守久貝因幡オイクタネ  
河内丹羽キボン堀織部北條美作西郷若狭本多  
因幡三宅主膳真田内記池田振津戸田内記皆一  
萬石

⑤大城ニ奉仕スル諸役人給料執政總裁土井大炊

殿金十五トシ執政酒井雅樂頭永井信濃守金十  
トシ酒井信濃守之二同シ酒井左衛門丞金一ト  
シヲ減スアウト伯耆守金六トシイノテ河内守  
金五トシ稲葉丹後守金四トシ酒井安房守及酒  
井山城守共ニ三億ギユルデン内藤伊賀守新庄  
因幡守ミフシ徳岐守松平衛門山ロイイシニモ  
及松平修理各金ニトシ阿部豊後守青山右京京  
極肥前板倉内膳成瀬壹岐及秋元但馬各一億五  
十萬ギユルデン堀田加賀三浦志摩前田權之助水  
野大和堀伊豆守三浦近江亮及本多三也各金一

トシ  
御膳所及奥向作事料年へトルケフホンデルドイセンド  
ギユルデン御側向金十トン以上ナリ此ノ如キヲ  
以テ年々表奥ニ消費スル所金ニ萬八千三百四  
十五トシナリ

突將軍ニ近侍スル兵隊ハ皆貴人ナリ小ナル管笠  
ヲ戴キ大ニ洞キ袴ヲ穿ツ或ハ長短ノ鑢炮ヲ持  
ツ和蘭製ニ異ナラス唯引キ金ヲ引クニ銃手ノ  
後ヨリセスノ離レテ之ヲ行フナリ又火薬ヲ納  
ルニ藥角或ハ革袋ヲ以テセス之ニ代フルニ四

角ナル箱ヲ以テシ筵ニテ製スルモ極テ巧ナリ  
腰ニ双刀ヲ帶フ一ハ短一ハ長シ  
再ヒ前話ヲ緘クヘシ則阿蘭使節アントラスフリヒ  
ウス氏及アントニウスフハンブルークホルスト氏千六百四  
十九年慶安二年己丑十一月二十五日長崎ヲ出  
帆シ日本將軍ニ進物ヲ捧ケントス阿蘭人二十  
名導水者三人豊後大坂ヨリ江戸ニ至ルハ陸地  
ヲ取ル使節ノ外譯官三名日本人三十名ナリ  
其船先ツホウキエシダソツク及セツ山ニ近接シ平  
戸オモダケ及牛首ノ間ヲ經テ豊後ヲ北ニ見更ニ

長崎ヨリ海路大坂  
ニ至ル

進テアオ姫島及玄界ニ向ヒ長共ヲ豊後ノ左ニ  
見ル又船端ニアイミシマヲ見ル之ヲ雖ル北  
東十二里ニアシアリ此市ハ白沙岸ニアリ海  
上ヨリ遙カニ之ヲ見ルヘシ蓋シ高山アリテ雲  
ニ聳フレハナリ次テ高名ナル一小邑ハミナガ  
ノ岬及小倉ヲ海ノ入江ニ見ル小倉ハ市街ノ上  
下ニ二箇ノ城郭アリ  
海ハ市街ノ東ニアリ北ニ日本アリ南ニ四國及  
土佐アリ日本地方左側ニ下ノ関アリ一堅城ア  
リ但シ別ニ一大堅城アリテ高山ニ築ク近傍ニ

イサカ港アリニ村アリ共ニ僅カニ四十戸ニ過  
キス

此瀬戸ニ無数ノ小島アリ一々名ヲ記セス前ニ  
ノトガマアリ次テ向宮島及禿アリ此ニ島ノ間  
ニ上ノ関アリ又東西日本地方ニ沿テヨウエス  
ワカロトカミナガリ及ヨコシミ諸島等アリ村  
アリ  
カロトニ對シテ日本ト土佐トノ間ニ極テ高キ  
山アリ樹木繁茂シテ其巔ニ達ス船ヲ東進スル  
ニ左方日本地ニ大市街タントノミナワリビク

ナキユム。及ビクナアリ。右方シラス島アリ。更ニ  
進テシノヤ。及サムヒキノ間。オウシマト。及オク  
ノ間。イエシマ。及室ノ間。ニ入ル。大河アリ。揖手  
ヲ停ムヘシ。  
室ハ日本地方ニアリ。極テ美ナル。湊ナリ。室ヲ距  
ル。一五里ニ。姫路アリ。一堅城アリ。好市ナリ。此地  
海水大ニ深シ。左方ニ。姫路ノ外。アハス竹島。ス方  
ヤ。ヲ見テ。兵庫ニ達ス。好晴日ニ着岸セリ。  
之ヨリ更ニ進テ。尼ヶ崎ニ至リ。十二月十三日ニ  
航海十九日ニシテ。大坂ニ達セリ。則チ挽舟ニテ

大坂ノ前市。アウシマニ碇泊セリ。忽チ日本ノ小  
舟三艘来テ。使節及旅具ヲ周旋セリ。  
日本人造ル所ノ小舟。早舟ト名ク。揖手四十人ヲ  
置ク。其船首ハ象頭ニ似タリ。スヒゲル。船ノ艦ノ  
夕ニ見エル所。船ノ号ヲ記シ。カユイト。船中ニア  
障子。杯立テ。銘リタル所ナリ。カユイト。船中ニア  
居ル所。ドモノ舵ハ蒲桃牙式ニ同シ。總テ木枘ヲ集  
メ製ス。某ノ早舟ニハ。揖手三十名。或ハ更ニ多人  
ヲ置ク。ナリ。其進行迅速ナル。一驚ク。一シ。則チ  
此舟大坂ヨリ長崎ニ達スルニ。十二日内ニアリ。  
而ノ其相距ル。一二百二十里ナリ。

⑤長崎ヨリホトコングニ至ルニ里。ホトコングヨリセツタ  
ニ至ル八里。セツタヨリセツ山ニ至ル三里。セツ山ヨリ  
オモタキニ至ル二里。オモタキヨリ牛首ニ至ル五里。  
牛首ヨリ平戸ニ至ル八里。平戸ヨリアウオニ至ル  
六里。アウオヨリヨベユニ至ル七里。ヨベユヨリ姫島ニ  
至ル七里。姫島ヨリ玄界ニ至ル七里。玄界ヨリア  
イミシマニ至ル七里。アイミシマヨリヤマカノ岬ニ至ル  
十四里。ヤマカノ岬ヨリ下ノ関ニ至ル七里。下ノ関  
ヨリノトガマニ至ル七里。ノトガマヨリ武庫ニ至ル  
十一里。武庫ヨリ宮島ニ至ル八里。宮島ヨリ亀ノ

崎ニ至ル十里。亀ノ崎ヨリ壳ニ至ル七里。壳ヨリ  
ヨエニ至ル三里。ヨエヨリ諏訪ニ至ル二里。諏訪  
ヨリカロトニ至ル三里。カロトヨリ蒲州ニ至ル  
五里。蒲州ヨリタントノミニ至ル十里。タントノミ  
ヨリヨウリシロニ至ル五里。ヨウリシロヨリビ  
グナチユニ至ル五里。ビグナチユヨリ白石ニ至ル三  
里。白石ヨリヒバニ至ル十里。ヒバヨリ牛窓ニ至  
ル七里。牛窓ヨリオタニ至ル四里。オタヨリ室ニ  
至ル六里。室ヨリ明石ニ至ル十三里。明石ヨリ兵  
庫ニ至ル五里。兵庫ヨリ大坂ニ至ル十三里。十

使節ヲリヒウス氏及ゲルークホルスト氏ハ其  
從者及旅具ト共ニ大坂ニ護送セラレ此到着ノ  
評判ヲ聞テ異人ヲ觀シカ爲ニ来ル所男女群集  
セリ就中橋上ニハ前面ヨリ来ル者夥シク大ニ  
混雜シ各橋重量ノ爲ニ破損シ各人蹂躪シテ相  
驚クヲ屢之アリ  
○別天ノ下ヨリ大洋ヲ航シ一萬三千里外ヨリ来  
リ殊ニ日本將軍ヘノ使節ヲ觀シカ爲ニ此危險  
ヲ侵シ大坂ノ紳士好奇ノ極木橋上ニ在テ生命  
ノ危キヲ顧ミス輻湊スルニ至ルナリ

ヤコブスベキス  
ペートルセルゲルスグーン

千六百十一年使節ヤコブスベキス氏及ペー  
トセルゲルスグーン氏大坂ヲ經テ當時駿河ニ  
在城ノ御所様ニ通商許可ヲ賜フノ禮辭ヲ述シ  
カ爲ニ進物ヲ捧ケントス則六月十六日平戸ヲ  
出帆シ先ツアイミ島ニ向ケ更ニアシアニ向ヒ  
終ニ小倉ニ達シ夜下ノ関ニ投錨セリ然レハ暴  
風止マサルヲ以テ再ヒイサキニ退キ之ヲ避ケ  
復タ下ノ関ニ至リタルニ風尚止マヌ潮十キヲ  
以テミアノ込ニ至ル上ノ関ヲ左側ニ見ル夜諏  
訪ニ至ル此島ニ近接シテ錨ヲ投ス諏訪ヨリ進

行シタレト風ニ逆スルヲ以テ舟子勞力三日ニ  
ノ僅カニ六十里ニ過キス尚助力ヲ假ラサルヲ  
得ス牛窓ニ至テ日本人四名ヲ雇フ相助テ搦手  
二十人下為ス風尚東吹シ且強シ大ニ勞力シテ  
室ニ至レリ狂浪ノ為ニ二船ノ覆没スルヲ見ル  
而ノ風候靜穩ニ及フヲ以テ高浪ヲ侵シテ進行  
ス潮勢強烈ニノ錨ヲ投スルヲ能ハス則チ竹島  
ヲ去テ兵庫ニ向フ之ヨリ大坂ニ進ム航路常ニ  
地方ニ沿フ導水者ノ勇力ニ頼ル八月十六日大  
坂港ニ至レリアウ島ニ投錨シ輕舟ヲ雇フテ伏

フランシスコカ  
シリキハゲナール

水ニ引カシム川水浅クシ大船ヲ通セサルニ由  
ル午後大坂ヲ發シテ夜中進行ス各所浅洲アル  
カ故ニ舟外ニ出テサルヲ得サルヲ數回ナリ  
大坂ニハ往時秀頼公往セリ十八歳ノ時脅迫シ  
テ其冠ヲ奪ハル然レト歳入極テ夥シク貴人及  
凡氏ヨリ献上スル所頗ル多ク富有無比ナリ  
爾後更ニ日本將軍トノ使節アリフランシスコ  
カロン氏及ヘンリキハゲナール氏是ナリ千六  
百三十四年十二月十四日出途ス平戸ヨリ航行  
シタサノ入海ニテ一泊シ翌日雨ニ支ヘラレヨ



ボキニ泊ス。ハガク街及姉島ヲ過キ終ニ下ノ関  
ニ碇泊ス。茲ニテ東印土商會ハ新鮮食料ヲ求メ  
リ。  
カロン氏更ニ進行セントスルニ北西風強吹ス  
深夜ニ上ノ關港内ニ入ル。兩岸人家アリ。是ニ於  
テ航行免狀ヲ示セリ。カロン氏更ニ大海ニ航シ  
テ。久ヲシテ頗レタル島ノ間ニ至レリ。雷雨晴テ  
蒲刈ヲ過キノワリニ向フ。峻峰多キ一市アリ。海  
岸一角ニ立派ナル殿堂アリ。其尖ハ海上ヨリノ  
目標トナル。

○此時ビグナチエム市ヲ左ニ見テ東北東ニ進ミ  
牛窓ニ達ス。夜室ニ至ル。是ニ於テ長崎奉行ハ阿  
蘭使節ノ譯官ヲ呼ヒ將軍ニ捧クルノ書ヲ得ン  
トス。依テカロンハ舟子百人ヲ雇テ進行シ相協  
カシテ明石ニ達セリ。此時強風北北東ニノ波浪  
頗ル高シ。  
明石ハ立派ナル街ナリ。側ニ堅城アリ。白壁水ニ  
臨ム。カロン氏兵庫ニ赴ケリ。午後二時ニ大坂及  
堺ヲ見ル。日没前少時ニ大坂ニ着シ。夜東印土商  
會定宿五郎兵衛殿ニ投宿ス。

大坂紀事

エリシウス氏及ブルトクホルスト氏大坂ヲ通  
過シ午後長崎奉行ノ旅宿ニ赴ケリ是日本僧ノ  
住居ナリシニ今使節ノ為ニ更ニ修理スル所ナ  
リ  
抑モ大坂ハ都府ニテ京ノ領分中ニアリ河口ニ  
岩礁多ク兀立ス此川ハ北流シテ京都ヲ經テ我  
迂曲ヲ為シ大坂ニ入ルナリ其源ヲ湖ニ取ル京  
都ト大坂トノ間ニハ砂堆淺洲多シ  
此河ノ末角ニ運上役所アリ上下スルノ船舶定  
額ノ金ヲ納ム此役所ハ立派ニノ各様ノ屋脊ア

リ

両側ニ高山アリ其後ニ大坂川ノ東西端アリ高  
塔アリ山ヨリ拔出ス右側運上役所ニ對シテ水  
城アリ垣壁堅固ナリ海水及河水ニ當ル周囲ニ  
銃窓アリ大炮ヲ備フ以テ海港ヲ防護ス此堅城  
ハ將軍様ノ築ク所ナリ然レモ其子東照宮様ノ  
遺志ヲ緬キエテ重ナルヲ三年千六百二十九年  
始テ落成スル所ナリ寛永六年  
此城後ニ十個ノ倉庫アリ海ニ向テ前街アリ又  
挺出セル石壁アリ此倉庫ハ極テ大ナリ而シテ火

ヲ避クルニ足ル。或ハ猛焰中ニ在ルモ。危険ヲ免  
カ。ルヲ保証スヘシ。  
又其側ニ海ニ向テ極テ立派ナル倉庫アリ。此内  
ニハ四國西國及土佐ヨリ。年々献貢スル諸貨賫  
ヲ藏スル所ナリ。

此等ノ諸建築ニ氣テ。水門アリ。之ヨリ貨賫ヲ運  
輸スル所ナリ。此門ニハ常ニ番卒五百人ヲ備フ。  
廣キ階梯アリテ。海ニ入ル。  
之ヲ距ル一遠カラス。更ニ建物アリ。其容廣大  
ナリ。多ク木枘ヲ積ミ。重々大小船舶アリ。其船非

常ニ洞シ市街ノ多部ハ山後ニアリ。然レ山ヲ  
割テ水ヲ通ス内部ニ川アリ。海ヲ距ル一遠カラ  
ス。大阪町奉行ノ邸宅アリ。立派ナル建築ナリ。  
四層ナリ。塔ノ如ク高ク天ヲ衝ク。

吉此建物ト水域トノ間ニ魔ノ殿堂アリ。日本人  
ニ其像ヲ尊敬ス。高價ナル金冠寶石多キ者ヲ頭  
上ニ戴ク。其頭ハ野猪ニ似タリト。牙アリ。挺出ス。  
胸ニ袈裟ヲ掛ク。四臂ナリ。其狀奇怪ナリ。一  
左臂ハ上ニ捧ク。中指ノ端ニ一輪ヲ執ル。他ノ一  
左臂ハ下テ全開百合ノ如キ花ヲ持ツ。上右臂ニ

ハ小蛇頭ヲ持ツ之ヨリ火ヲ噴ク。下右臂ニハ金  
棍ヲ取ル。足ニテ他ノ卧魔ノ胸。及腿上ニ立ツ。此  
魔ハ怪顔ニノ牛角ヲ生ス。頸圓ニ卷木綿ヲ纏ヒ  
中間紐ニテ締フ。脚間ヨリ長尾ヲ垂ル。廣キ莫大  
小ヲ穿ツ。膝ヲ過ク。右臂ヲ挺出シ。左臂ハ曲テ脇  
ニ浴フ。此魔ヲヨシシ。トテバト名ク。而  
ノ神ハヨシシ。トテバト名ク。日本ハ大ニ此  
魔ヲ尊敬シ。其妨碍ヲ避ントス。  
西印土人。亦此説ヲ唱フ。ヒナリ。プエナリ。魔ヲ大ニ  
尊信スル。他佛ニ過ク。此魔ハ青色ノ臺上ニ坐

ス。而ノ危険ナル高所ニアリ。其四隅ニハ尖端ニ  
蛇頭ヲ具スルノ杖ヲ挺出ス。此佛ノ前頭ハ青染  
ス。鼻上ヲ過ク。兩耳ニ青線アリ。頭ハ鳥嘴ニ似テ  
羽ヲ束ネタル者ニテ。銹ル口端ヨリ金ヲ吐ク。左  
手ニ白色ノ請ケ笠。及相交ニスル白色羽束ヲ持  
ツ。之ヨリセーゲンタツキ。ノ御幣ヲ出ス。側ニ五  
矢アリ。墨西哥人ノ説ニ據レハ。是天ヨリヒナリ  
ゴエナリニ賜フ所ナリ。右手ニ蛇状ニシテ青波條  
アル杖ヲ持ツ。胸ニ恐ルヘキニ眼アリ。腹ニ孔ア  
リ。開キタル口ノ如シ。眼ト口トノ間ニ異状ノ鼻

アリ。又此佛前ニ帷帳ヲ拭ク。又其周縁ニ寶珠金剛石及金鎖及各色ノ粧鈔アリ。

三又魔神ヲスカトリヒユカアリ。黒光アル石ニテ造ル。貴重ナル粧飾ヲ備フ。口ニ銀翮ヲ啣シ。長サ指ノ如シ。此翮或ハ綠色或ハ青色羽ヲ生ス。久時ノ後變色ス。最下ノ毛ハ磨キタル金鎖ニテ鈔ル。其金耳ヨリ画キタル煙ヲ現ス。此兩耳間ニ前後ニ各種ノ貴石ヲ掛ク。頸圍ニ寶玉ヲ鈔リ。胸ニ壑ル。臂ニハ金環ヲ纏フ。臍ニ綠石ヲ嵌ス。左手ニハ扇ヲ持ツ。其面ハ金版ニテ非常光ヲ放ツ。鏡ノ

如シ。墨是哥人ハイトラセアイト名ク。テスカトリヒユカハ衆人ヲ罪人ト為ス。蓋シ各人ヲ罰セント為ルナリ。故ニ右手ニ四矢ヲ持ツ。テスカトリヒユカノ不正人ヲ處置スルニ如何ナスヤヲ想像セシムル為ナリ。

再ニ都府大坂ヲ説クヘシ。魔神ヨシチーチーデバーク殿堂ノ後ニ川ニ浴テ番所アリ。構造極テ高シ。塚ニ行クノ大道ニアリ。

右側ニ大寺アリ。内ニ一像ヲ置ク。高サ五十尺。其頭ハ純銀ニテ製ス。是ボム玉ヨリ寄スル所ナリ。

抑モ其國ニハ銀坑多シ  
左手ニ將軍ノ遊觀櫓アリ。山後ニアリ。其尖高ク  
突出ス。之ニ兼テ城郭ノ櫓アリ。大阪ヲ距ル南方  
半里ニアリ。  
市中ニ觀音堂アリ。日本人ノ説ニテハ魚及水ヲ  
守護ストス。此堂ヲ距ル數歩ニノ番所アリ。其屋  
脊遠カニ壁ヲ過テ突出ス。外壁ニ向フノ一道アリ。  
瓦石堆ヲ為ス。外壁内ニ大門アリ。二重ノ九天  
井ナリ。門ヲ過クレハ廣所アリ。樹木多シ。殿堂ト  
分ツニ第二壁ヲ以テス。白石灰ニテ墺ス。四角ニ

分畧スルノ極テ巧ナリ。表面細長ク。四角ナル圓  
ニアリ。

内壁ノ内ニ寺前ニ六角圓門アリ。屋脊高ク尖ル。  
是日本人貧困ノ為。或ハ不治ノ病苦ノ為。或ハ久  
時廻國拜佛スルノ後。自ラ生テ厭フテ溺死スル  
者多シ。其人二日前ニ此觀音門内ニ来リ。流ニ臨  
ミ身ヲ滿水ニ投ス。而ノ直チニ多水ヲ飲ミ自ラ  
死ヲ求ム。

七三 此ノ如キノ自裁ハヘルヲ教徒ノ衆譽トスル所  
ニテ。往時ハ獨逸人。尤モ佛果ヲ得ルトスル所ナ

リ夕キチユスハ。大洋ノ一島ナリ。一小森アリ。茲  
ニ神聖ナリトテ尊敬スル。一小車アリ。衣ヲ以テ  
被ノ。一二僧ノ外ハ之ニ近接スルコトヲ得ス。信心  
者其室ニ至レハ則チ之ヲ悟リ。水牛ニ引カレテ  
大ニ尊敬セラル。之ヲ向ハントスルニハ。數日前  
ニ報告シ其所ヲ示ス。戰時ニモ平時ニモ僧徒ハ  
信心者ヲ衆人ヲシテ圍繞シテ寺ニ至ラシム。此  
時車衣服及信心者共ニ隱秘セル湖ニ導カル。從  
僕此事ヲ進ノ之ヲ為ス。後此湖中ニ入ル。之ヨ  
リ秘密ノ驚駭及神聖ヲ求ムルノ無智ハ直チニ

死スヘキヲ知ルヘシ。文意事件不詳。再考スヘシ。

ボリプスクリユヘリウス氏。舊獨逸國ニ於テ証言  
ス曰ク。上ニ記スル夕キチユス島ハリユゲンニ他ナ  
ラス。今日尚岬ニ浴テデスチユベシツ深林ニスチユベ  
ンカーノメルアリ。此内ニハ不可測ノ深湖アリテ  
水ヲ盈ツ。魚類極テ多キモ舟ヲ泛フコト能ハス。又  
網ヲ投スルヲ許サス。古人言フ。此湖恐ルヘシト  
土人皆深ク之ヲ信ス。數年前粗暴人アリ。此湖ニ  
舟ヲ泛ヘ。翌日魚ヲ漁セントセシニ。其舟去テ往  
ク所ヲ知ラズ。百方之ヲ求ムルニ。其舟高樹ノ杪

三 上ニ在ルヲ見ル。内ニ一漁夫アリ。群魔ノ中。誰  
カ此舟ヲ樹杪ニ置タルヤト向テ。忽チ異聲ヲ  
發シテ。之ニ答フル者アリ。而ノ其人ヲ見ス。群  
魔敢テ之ヲ為シタルニアラス。余自ラ余カ兄弟  
ナルコトヲト共ニ為ス所ナリト。啻ニリュゲ  
シノミナラス。更ニ全獨逸ニ於テ。ヘルタ佛ヲ信  
シテ溺死スル者サナカラス。  
更ニ觀音寺ヲ説ク。一シ。三層ノ天井アリ。其屋脊  
ハ壁ヲ超テ六角圓狀ニ突起ス。各側三層窓アリ。  
唯其第二ト。最下層トノ間ニ廊下アリ。周縁ヲ田

繞シ。二十八柱アリ。側壁ニハ各種ノ貝介アリ。大  
ニ堂内ヲ粧飾ス。  
堂内ニ觀音アリ。起立ス。日本僧ノ説ニテハ二千  
年前ニ存生シ。而シテ日月ヲ造成セリト。其像ハ用  
キタル魚口ヨリ。半身ヲ現シ。頭ニ花ヲ戴テ。四臂  
アリ。一左臂ハ上ニ捧ケ。示指端ニ環ヲ取ル。一左  
臂ハ下テ指間ニ花ヲ握ル。右手ハ高く捧ケ。指ヲ  
屈ス。下右手ニハシケプレートスタフヲ握ル。臂頭  
及腹ニ貫珠ヲ纏フ。肩ヨリニ重ニ袈裟ノ如キ物  
ヲ掛ク。其前ニ大ナル貝殻アリ。岩石間ニアリ。嬰



兎半身ヲ現出シ合掌シテ觀音ヲ祈念スル狀ノ  
如シ。腹圍ニ纏フノ袈裟ハニ裂アリ。貝殼ヲ被フ。  
右側ニ高ク細長キ臺アリ。頗ル神前机ニ似タリ。  
四個ノ佛像アリ。祈念ノ狀ヲ為ス。皆手ヲ寄テ水  
ヲ注キ線狀ヲ為シテ。脚傍ニアル圓桶内ニ入ル。  
此像及貝殼ノ譬諭ハ坊主ノ異教ヲ排斥スルノ  
具ナリ。

⑦更ニ觀音堂ノ右側ニアムミテ。スノ住居アリ。  
更ニ町ニ接シテ。坊主ノ立派ナル寺院アリ。二  
個ノ屋脊高ク聳ユ。大改他ノ家屋ノ上ニ出ツ。氣

テ一建築アリ。兵卒ノ長官。茲ニ住ス。天井ノ二重  
ナルト。廣大ナルトニ由テ。大ニ他ニ擢テ現著ナ  
ルナリ。又之ニ近接シテ。一ノ殿堂アリ。二百六十  
體ノ佛像ヲ安置スル所ナリ。構造極テ盛大ナリ。  
日本國庫ノ長官ノ住スル所ナリ。  
一ノ遠見櫓アリ。其眺望ノ遠キ。陸路六里。海路  
七里ヲ一目スヘシ。又驚クヘキ一寺アリ。一老僧  
ノ肖像ヲ安置ス。蓋シ神聖ノ憑ル所トスルナリ。  
殿堂ノ一部ハ海ニ臨ミ。一部ハ山ニ倚ル。  
又大改ハ日本他ノ諸地ト同シク。壁或ハ土堤ヲ

設ケス。市中ニ諸川アリテ。縱横貫流ス。各様ノ橋  
梁アリテ。我阿蘭ニ異ナラス。兩岸ニ立派ナル家  
屋アリ。石灰ニテ塗墁ス。外部ハ雨水ヲ防クニ薄  
キ木板片ヲ以テス。屋内敷室アリ。將軍様ノ千六  
百十四年ニ七艘ノ船ニ追放人ヲ載テ大坂ヨリ  
長崎ニ送リタルアリ。是異教ヲ禁スルカ為ノ  
所業ナリ。此時大坂ニテモ相模殿羅瑪教ヲ信ス  
ルカ為ニ耶蘇教寺ヲ禁止セシナリ。  
其餘勢大ニ残酷ナル事件ヲ引キ起セリ。蓋シ異  
教ヲ固信スルノ徒ヲ懲戒スルナリ。大坂ニハ屢

戦争アリ。是日本人互ニ威權ヲ争フニ起ル所ナ  
リ。是カ為ニ市中及城郭兵亂ヲ蒙ムルノ頻回ナ  
リ。  
十六百一年太閤様薨去ノ後ニ大戦争アリ。五諸  
侯アリ。合議シテ内府様ニ敵對ス。其巨魁ハ九ヶ  
國ノ太守毛利殿ナリ。自ラ四萬ノ兵ヲ領ス。皆人  
質ヲ呈ス。太閤様ノ遺財及軍器等多年ヲ支ノヘ  
シ。然レモ此諸侯中意ヲ内府様ニ傾ケ。竊カニ接  
會ヲ伺フ者アリ。何トナレハ上ノ諸侯ハ法制極  
テ嚴ニノ。曾テ八萬ノ兵卒或ハ戰場ニ鬪死シ。或

ハ割腹シ。或ハ敵手ニ捕ハレ。幸ニノ遁レテ一生  
ヲ得ル者稀ナレハナリ。  
内府様ハ大坂ニテ大勝利ヲ得タリ。敗績者ハ此  
大坂城ハ堅固破ル可ラス。百物完備強兵充盈シ  
タルニ敗績ノ速ナルヲ以テ。毛利候ヲ怪シム。  
毛利候ハ内府様ノ到着前ニ勢ヲ率テ城ヲ出テ。  
大坂外ニアル貴價ナル園圃ニ遁レ。自ラ敵兵ニ  
属スルニ非サルノ意ヲ表ス。  
薩摩候ハ大ニ勇猛ナリ。驍兵六百ヲ有ス。内府様  
ノ為ニ大ニ敗績シ。内府様ニ先夕ツツ一二時大

坂ヲ退キ。船ヲ索ノテ。大坂ヲ距ル一二百里ナル  
薩摩ニ歸リ。自國ニ在テ兵ヲ煉リ。内府様ニ抗セ  
ントス。

此ノ如キ戦争ノ外。大坂ニハ。千五百八十五年九  
月四日夜半大地震アリ。大損害ヲ蒙レリ。則チ震  
動劇甚。半時間ニ百回震揺セリ。人家顛覆シ。大厦  
高堂先ツ頽レ。凡ソ有名ナル建築皆倒ル。是太閤  
様ノ築ク所ニテ。周回ニ堅固ナル廊下アリ。十五  
萬ノ兵ヲ容ルニ足ル。蓋シ支那ヨリ奉使アル片  
此ノ如キ壯大ヲ誇示シテ。其膽ヲ破ラントスル

カ為ナリ

ヒリシウス氏及ブルークホルスト氏ハ千六百

四十九年十二月二十日大坂ヲ度ス詰且先慶安ニ荷

物ヲ輸送ス蓋シ八十二馬ヲ要スル所ナリ此一

行ハ合計四十四人ナリ阿蘭人及奉行ハ馬ニ乘

ル荷物ニハ銀船大鏡及他品々ヲ荷フ者百人ナ

リ使節ヒリシウス氏及ブルークホルスト氏ハ

乗物ニ乘ル總計三百人百二十八馬ナリ

大坂ヨリ陸地京都ニ

使節ノ一行ハ日午牧方ニ達シ茲ニ午餉ス四時

ヲ築ク。澁候ヨリ一使ヲ送ル其行装恰好ナリ。乘

物ニテ從者数人ヲ隨フ道路ハ高丘ニシテ川ニ

沿フ堤ニ沿テ田野アリ遠望目ヲ極ム。全野總テ

凍涸ス堤上及終所ニ彼此村落アリ堤ノ兩側ニ

ハ植木ヲ植ム

樹木中杉樹最モ多シ其杪高ク聳ユテオブラス

テユス氏曰ク悉里人及ベニキール人ハ杉樹ヲ

以テ造船ノ料ニ供ス當時ハ日本ニテモ之ヲ用

ユ是怪シムニ足ラス抑モ杉ハ萃尔斯頂ノ液ヲ

含ムヲ以テ能ク腐敗ヲ防ク此理ヲ悟ラサルヨ

リ。日本人ハ杉板ノ或時ニ於テ。後汗スルヲ見テ  
驚クナリ。抑モ空氣濕潤。南風アル時ニハ杉ヨリ  
油ヲ得ヘキナリ。此樹ハ之ヲ植ル地味ノ差異ニ  
應シテ。大小長短アリ。悉里ノ山ニハ大ニ繁茂シ。  
僅カニ四月ニノ臂大ニ至ル。其高サ之ニ適フ。日  
本ニモ杉樹多シ。其葉ハ密ナラズ。末端棘状ナリ。  
此杉ハ杜松ト大ニ相似タリ。然レモ杜松葉ハ更  
ニ美ナリ。其尖高擧セス。之ヲ伐レハ速カニ腐敗  
ス。又杉ハ頗ル佳香アリ。没薬ニ異ナラズ。其實ニ  
ハ芥ノ如キ四個ノ白色核アリ。黄赤染料ヲ含ム。

杜松子ハ黒色ニシテ。滋養不佳味ナリ。  
杉樹ヨリ出ル所ノ孽アルハ能ク屍體ノ腐敗ヲ  
防護ス。以テ永久ニ貯ルヘシ。三様ノ味アリ。内部  
核ノ周圍ハ淡ク。外殼ハ甘ク。肉ハ酸甘相半ス。全  
年實アリ。甲開花スルアリ。乙成熟スルアリ。丙結  
果スルアリ。杉實ハ大ニ温暖ナラシム。咳嗽。痙攣。  
淋病ヲ治シ。又之ヲ身体ニ塗レハ。能ク毒臭ヲ避  
ク。  
且杉樹ハ常緑樹ナリ。挺出セル枝アリ。直立シ。天  
ヲ衝ク。画工其真形ヲ模写スルニ苦シム。其枝重

六帝城京都ハ山城ノ國ニアリ大坂ヲ距ル一十八

キニ過クレハ相共ニ支柱スル一能ハス實ハ熟  
スルニ及ヘハ露及雨ニ榮シテ墮落シ枝ニ圓莖  
ヲ遺ス此莖二年ヲ經サレハ尚皮ヲ存ス實ノ始  
ヲ生スルハ春ニアリ而ノ全熟スルニハ冬ニ至  
ル  
此ノ如キ川ニ浴テ樹木アル長キ土堤ヲ過テ阿  
蘭使節ヒリシウス氏及ブルクホルスト氏ハ  
澱ヲ經テ京都ニ達セリ是巨高ノ住居スル所ナ  
リ

里此川源ヲ大津ト膳所トノ間ニアル湖水ニ取  
ル京ヲ距ル一三里流ル一十八里大坂ニ至リ海  
ニ入ルニ浴テ將軍ノ血ノ森アリ此名称ハ日本  
將軍信長ノ此森ニテ元ヲ失ヒシニ起ル所ナリ  
之ヲ歴史ニ徵スルニ千五百八十二年天正十年  
六月二十二日ノ事ナリ

信長三體佛堂ヲ建ツ

信長此時將軍タルヲ以テ此叡山上ニ新街アルニ  
エギヤマヲ開拓シ此街ニ一寺ヲ築ケリ而ノ此寺  
ヲ粧飾センカ為ニ全國有名ナル佛像ヲ安置セ  
リ其寺中ニ華美ナル一廟ヲ作り礎石ニ兵器及

譬諭ノ諸狀ヲ彫刻シ石上ニ一像ヲ安置ス。建築  
ヲ急速ニシ落成スルニ及テ日本全國ニ高札ヲ  
掲ケ廣告ス。其文ニ曰ク。アルシユギヤマニ築ク所  
ノ寺廟ニ安置スル佛像ヲ参拝セサル者ナカレ  
ヘシ。是天地ヲ呵護スルノ佛ナレハナリ。之ヲ  
示スノ後信長更ニ弟ニ令テ出セリ。凡ソ信心  
ノ者ハ二月晦日將軍ノ誕日ヲ賀シ兼テアルシ  
ユギヤマノ廟ニ拝スヘシト。帝ニ廣告スルノミナ  
ラス。更ニ誓約脅迫スルニ至レリ。曰ク三體佛ヲ  
定時ニ定所ニ於テ拝スル者ハ貧人ハ富者トナ  
リ。富人ハ愈富ヲ加ヘ。壽命長久。一身病厄ヲ免カ  
ルヘク。之ヲ信セサル者ハ各種ノ災難ヲ蒙ルヘ  
シト。

七 此廣告ニ由テ無教ノ人員京都ニ集會シ。大都會  
ナルモ此多人ヲ容ルニハ尚小ナリトス。町家ニ  
ハ復々宿泊スヘキ餘室ナキヲ以テ都府ノ周縁  
數里ノ地原野ニ幕ヲ張り露宿シ或ハ舟中ニ止  
宿スルアリ。信長ノ子先ツ此三體佛ヲ拝シ。次テ  
諸侯貴族参拝セリ。  
此事終ル後暫時ニノ恐ルヘキ彗星ヲ現ヌ。又白

日ニ天ヨリ多クノ火ヲ兩ラズ。是信長ノ元ヲ  
失フヘキヲ天ヨリ預メ告ケ示スノ徴ナリ。京都  
ヲ距ル半里ニシテジユボ村アリ。信長此地ニモ一寺  
ヲ築ケリ。其内一佛像ヲ安置ス。其面貌ハ信長ノ  
真容ヲ摸スル所ナリ。此像圓キ鑲製ノ蓮臺ニ坐  
ス。花瓣層々極テ精巧ナリ。相重疊シテ周回ニ立  
ツ。其像兩臂ヲ集メテ腹上ニ置ク。頸回ニ袈裟ヲ  
懸ク。兩端相開ク。胸ニ貴重ナル粧鈔アリ。三重ノ  
寶珠ニテ頸及腹ヲ纏フ。其冠最モ華美ナリ。是信  
長ノ自ラ嘗テ戴キシ所ナリ。

永祿八年久秀  
弑義輝

六千

五百六十四年ハ公方ノ日本全國ヲ領セシ片  
永祿七年  
ナリ。京都ニ在住セリ。暴徒一萬二千人蜂起シテ  
公方ニ抗シ。遽カニ京都ヲ襲テ。四方ヨリ火ヲ放  
フ。公方困厄シ。火焰ヲ衝テ遁レ奔ル。從兵僅カニ  
二百人。頸及胸ニ重創ヲ受ケ斃ル者三人。暴徒宮  
内ニ蹂躪ス。而シテ公方ノ母及女ヲ見テ殘酷ニ辱  
置セリ。公方ノ妃ハ僧院ニ遁レリ。後之ヲ發覺シ  
テ頸ヲ刎ス。  
公方ノ血族死ヲ免カル者ナシ。唯公方ノ幼子ヲ  
殺サスノ佛事ヲ營マシムル為ニ。尚其異志アラ



ンヲヲ恐レテ。之ヲ堅室ニ籠居セシム。然レ氏竊  
カニ之ヲ破テ。奔テ口カ城ニ在ル幡殿ニ身ヲ托  
セリ。幡殿之ヲ遇スルニ。懇馬尾張ノ信長ト共ニ  
同心協力シテ。之ヲ補翼シ。二萬六千ノ兵ヲ引テ。  
公方ノ敵ヲ折テ。信長容易ニ京都ヲ取レリ。則チ  
焼跡ニ宮殿ヲ新築ス。職工千五百人ヲ驅役シテ。  
宮殿ヲ營ミ。往時ノ壯觀ヲ復セントシ。自ラ工場  
ニ臨テ之ヲ監責ス。一工人ノ首ヲ斷セリ。蓋シ其  
者通行婦人ヲ偵視セシカ。為ニ被リ物ヲ掲ケタ  
ルノ不禮ヲ戒ルナリ。

抑モ信長心中竊カニ期スル所アリ。他候ヲ膝下  
ニ踏ミ自ラ王トナリ。三十候ヲ此ノ如クナラシ  
メント。是ニ於テ公方ノ冠ヲ取テ。己ノ頭ニ頭ニ  
戴キ。而シテ之ヲジユボノ佛像ニ載ス。其像ハ信長ノ  
面容ヲ模スル所ナリ。其目的ハ世人ノ己ヲ尊信  
シテ佛ト為シ。追從シテ常ニ足下ニアラシムル  
ニアリ。

然レ氏衆人此ノ如キノ豪慢ヲ厭フアリ。就中明  
智ハ短慮ナル武將ニ。大ニ之ヲ可トセス。信長  
之ヲ攀テ。丹後ノ太守トナシ。軍將ニ任セリ。此ノ

天正年光秀弑信長

如キ恩惠ヲ蒙ルモ明智ハ尚憚トセス信長ノ  
豪慢ニノ自ラ佛トナルノ意ヲ惡ム則千五百八天正十年八  
十二年六月二十二日邊カニ京都ヲ襲フ信長之  
ヲ防クニ力足ラス遁レテ京都ノ川ヲ越ス森中  
ニ追跡セラル勇ヲ奮テ戦フモ終ニ弑サレタリ  
是ニ因テ此森ヲ將軍ノ血ノ森ト称ス其ジエボ村  
ニ築ケル寺八年々銀一萬二千兩ヲ賜フ日本ノ  
一兩ハ和蘭貨幣ノ五十六ストイフルニ當ル  
又信長ノ他ノ恨ヲ受クル所以ハ残酷ナル所業  
多キト又誓約ヲ破リ許諾ヲ得スノ恣ニ他人ノ

京都紀事

所領ヲ奪フ多キニ由ルナリ  
再ヒ京都ノ紀事ニ及フヘシ都府ノ右側ニジエボ  
山アリ其巔高ク雲ヲ衝キ且激ニ向ノ其麓ニジ  
エボ村アリ信長築ク所ノ華麗ナル寺アリ深林  
中ニ堂宇隱見ス堂内釋迦ヲ安置ス他佛ニ超テ  
之ヲ本尊トス此堂ハ常ニ閑ワ之ヲ開ク一一年  
一回ノ之故ニ開扉ノ日ニハ法華宗ノ人群集參  
詣スルナリ

神宗

元日本元末宗旨ヲ區別スルノ頗ル多シ然レモ  
其最ナル者三派アリ第一ハ神宗ナリ死後再生

佛法

及善惡應報ノ説ヲ取ラス。稱宜ハ禍福ヲ神ニ歸シ之ヲ崇敬スルヲ要トス。故ニ神社ヲ建テシム。重大事件アル時或ハ將軍ニ向テ親從スルノ誓約ヲ為ス時ニ之ヲ誓願スルナリ。各種ノ品ヲ捧ク。或ハ以テ災難ヲ遁レントシ。或ハ幸福ヲ祈ラントス。

第二派ハ魂魄不死轉生輪依應報ヲ説ク。ゴラスニ同シ。ゴラス氏曰ク。魂魄ハ不死ニ。一タビ死體ヲ出レハ他ノ萬物ニ轉移シ。或ハ人身ニ入り。或ハ獸體ニ入り。或ハ草木ニ入ル。余

素ト前言スルカ如ク。ゾルキユリウスノ子ナルアエタリ。デスナリ。ゾルキユリウス曾テ余ニ告テ。不死ノ外欲スル所ヲ望ニ任セテ授クヘシト。此時余凡ソ生時及死後ノ諸事ヲ聞知セ。ソトテ請ヘリ。此故ニ其死ニ當テ他ノ魂魄ノ如ク天ヨリ流レ来ルノレテヲ吞ムヲ要セス。蓋シ之ヲ吞ムハ。世上ノ履歷ヲ忘レシノンカ為ナリ。又エタリ。デスノ死セシ時。余エウポルヒエストナリ。後ニヘルモケミエストナリ。當時ハペールリエスニ。則チデリールノ一漁夫ナリ。而シテ終ニハゴラスト

真宗

ナリタルナリ

真宗ニテハオミトナル佛ヲ拜ス之ヲ阿彌陀ト  
称ス日本人ノ佛名ヲ數フルハ非常ニ大ニ我  
思考スル所ニ異ナリ何ニ由テ此南無阿彌陀佛  
ノ名ヲ及復唱フレハ幸福ヲ得ルニ足ルヤ唯余  
ヲ幸福ナラシメヨト祈ルニ過サルナリ此唱名  
ハ數ヲ數フルニ貫珠ヲ以テス法王唱歌ノ風俗  
ニ異ナルヲナシ此ノ如クナレハ阿彌陀ノ自ラ  
貫珠ヲ持ツハ抑モ何ノ意ソヤ  
又日本ニハ第三種ノ教法アリ法華宗ト称ス釋

法華宗

迦ヲ奉ス南無妙法蓮華經ノ七字ヲ連唱スレハ  
大幸福ヲ得ヘシト固信ス而ノ日本人ハ此印土  
ヨリ未ル語ヲ真意ヲ知ル者ナシ釋迦ノ徒弟ニ  
弘法大師及行基菩薩ノ二人アリ共ニ日本人ノ  
尊奉スル所ナリ弘化大師ハ最モ始テ惡魔ヲ使  
役スル所ニシテ支那ノ佛法前記者及幻術ニ近キ  
教ナリ自ラ山間深林ニ身ヲ寄セ塵世ノ外ニ在  
ルナリ  
ジエボ村ニアル寺ニ釋迦ノ像アリジエボハジ  
エボ山ノ麓ニアリ京都ヲ距ル一羊時程大阪ニ

至リ海ニ入ルノ源川此村ヲ貫ク。  
此川ノ西側彼此ニ人家アリ内側ニ二塔アリ川  
ニ架スル橋ノ兩岸ニ立ツ門アリ之ヲ出レハ大  
阪及伊勢ニ行クヘシ番所アリ騎兵歩卒之ヲ警  
固ス鑿察極テ嚴ナリ火見櫓アリ非常ニ高シ之  
ニ上レハ王城及膳所湖ヲ見ルヘク又アウロ山  
ト名クル美味ノ果實ヲ出ス山ヲ見ル桃山カ  
谷又別ニ遠見櫓アリ其下ニハ美麗ナル武具庫ア  
リ其右ニ僧徒ノ六層塔アリ此寺ニハ日本高位  
ノ僧アリシヤシモシンスト名ク世ヲ棄ルノ意

ニ出ワ

都府ノ中位ニ皇帝居住ノ宮殿アリ堂宇高ク聳  
ユ以テ安全ヲ防護スルナリ抑モ皇帝ハ足地ニ  
接スルナシ日輪頭ヲ照ラスナシ露天ノ下  
ニ立ツナシ髮髻及爪ヲ短截スルナシ内裡  
ノ膳ニ供スル諸食物ハ毎回新器ヲ調理シ新器  
ニ盛ルナリ  
右側ニ帝居アリ山ニ倚ル故ニ大阪ヨリ京都ニ  
来ル人見ルヲ得ス然レハ高塔アリ其尖端山上  
ニ出ツ是信長ノ巨額ヲ費シテ建築セシ所ナリ

曩ニ亂黨アリテ公方ニ抗セシキニ兵火延テ帝  
居ニ及ヒ終ニ灰燼トナルヲ再築セシナリ  
園囿樹木多ク粧飾充備天工人工盡サレルナシ  
大ニ歡樂スヘク又驚駭スヘシ  
兩側ニ縉紳ノ邸宅アリ皆日々皇帝ニ迎接スル  
人ナリ建築相競テ壮大ヲ極ム此一局部内ニ精  
巧職工ノ一世界アリト云フモ可ナリ  
帝居ノ左側ニ一高塔アリ金板ヲ以テ覆フ其尖  
殆ント天ヲ衝ク帝居ノ下流ニ浴テ十二宮アリ  
許多ノ嬪妾ヲ住マシメ帝意ニ任セテ之ヲ撰ハ

シム

許多ノ建築アリト虽就中最モ盛ナルハボンシ  
ヤウセン長ノ宮殿ナリエグラムニツト名ク學  
問ノ光輝トノ意ナリ之ヲ距ル數歩ニノ内府公  
ノ宮殿アリ京都ヲ距ル一四里ニアリ  
更ニ四角三層ノ堂宇ヤナカラズ皆高ク雲ニ入  
ル鍍金セル大佛アリ日本全國ノ人群集參詣ス  
ル所ナリ  
シヨクワンシー役所ハ頗ル壮大ナリ運上所ハ澱ノ  
門ニ接シ我輩阿蘭使節之ヲ通過シテ大阪ヨリ

末ル所ナリ。茲ニテ通行鑑札ヲ示シ。尋常ノ稅ヲ  
拂フヘキナリ。

運上所ノ左側ニ非常ニ結構ナル寺アリ。屋脊上  
ニ三夫アリ。内ニ夥シキ佛像アリ。全年ノ日數ニ  
同シ。毎日順次ニ一像ヲ轉位シ。之ヲエグラムニ  
ツノ座ニ置ク。一夜空シク消過スレハ。其僧無難  
ニ堂ニ入ルヲ得ス。

護兵ノ宿所ニハホンロコウバリライドノ住シ。三層屋  
ナリ。非常ニ立派ナリ。其傍ニ遠見櫓アリ。晝夜警  
固スル兵卒二千ナリ。京都ノ末端ニ騎兵營所

アリ。四萬人ノ兵ヲ納ルヘシ。

尋常市街ノ家屋多クハ極テ華麗ナリ。房室頗ル  
多シ。皆要アリトス。各室襖ニテ分界シ。金彩燦  
爛タリ。容易ニ開閉スヘシ。室ノ大小。臨時適宜ニ  
スヘシ。京都ハ日本ノ他地ニ比スレハ。最モ繁華  
ナリ。蓋シ兵馬ノ權。武家ニ帰セシ。以テ未敢テ不羈  
ヲ謀ル者ナク。又内裡ヲ保護スル。一鄭重ナルニ  
由ル。

京都ヨリ陸地江  
至ル  
三月二十一日出立  
三月二十一日着江戸

△阿蘭使節ヲリヒウス氏及ブルークホルスト氏。京都ニ逗  
留一夜ニ。十二月二十一日。大津ニ向テ上途ス。

其道山間ニ入ル。往々人家アリ。側ニ一城アリ。大  
湖水ノ角ニアリ。使節ハ大津ニテ休息セシト欲  
シタレト疾行スヘキトアルニ由テ膳所ヲ通過  
セリ。平ナル列樹道アリ。兩側樹木ヲ植テ美觀ナ  
リ。其端ニ一村アリ。水ニ臨ム。其前面ニ膳所城ア  
リ。二條ノ河アリ。一ハ小木橋ヲ架ス。第二橋ハ大  
ニノ長サ二百三十歩ナリ。  
此路上ニ乞丐多シ。全國到ル所皆同シ。多クハ致  
子ヲ伴フ。手ニ文庫ヲ捧ケ内ニ施物ヲ集メ貯フ。  
母ハ木鉢ト瓢葦トヲ携テ各々紐ヲ繫キ以テ帶ニ

締フ。木鉢及瓢葦ハ腰上ニアリ。其下ニ財布ヲ置  
ク。將軍ノ爲ニ禁セラレテ全家婦子孫ヲ携テ廻  
國スルアリ。小兒及老人ハ四角ナル籠ニ納レ。網  
ニテ前後ノ牛角ニ固結シ以テ伴行スルアリ。相  
前後シテ日本前哲ノ善行ヲ詠スルノ歌ヲ唱フ。  
沿戸之ヲ唱テ施物ヲ請フ。

○膳所ヲ過テ日暮草津ニ達セリ。頗ル險道ヲ經タ  
リ。此地ニ有名ナル日本杖アリ。稚キ莖ハ快味ノ  
液ヲ多生ス。内部ハ海綿状ナリ。極テ強靱ナリ。連  
々結節アリテ上邊次第ニ細シ。此莖編ムヘシ。是



ヨリ大船ノ碇綱ヲ製スヘシ。其水ニ耐ユルノ力  
ハ。麻綱ニ異ナラス。又之ヨリ各種ノ籠篋等ヲ造  
ルヘシ。歐羅巴製ノテーン細工ニ勝レリ。各戸競  
テ之ヲ販ク。  
未明ニ出立シ。石部ニ達スルニ。日未夕上ラヌ。石  
部ヲ距ル一ニ里ニノ。餘方川アリ。十時ニ水口ニ  
達セリ。一城アリ。大道ヲ徴スルニ足ル。水口ニ至  
ルマテハ。道路平坦ニノ。兩側ニ樹木及稻田アリ。  
遠望大ニ目ヲ喜ハスヘシ。是日本米ノ最上品ヲ  
産スル地ナリ。印土海ニ輸出スルノミナラス。更

ニ歐羅巴ニモ至ルナリ。稻ヲ収獲スルハ。九月ニ  
アリ。最上白米ハ。最モ貴價ナリ。暹羅或ハ百露ニ  
産スル品ハ。大ニ廉ナリ。日本人モ。印度人モ。粉末  
ヲ製スルノ碾ヲ知ラス。故ニ歐羅巴人ニ擬シテ  
蒸餅ヲ製スルヲ知ラス。米亦蒸餅ヲ製スヘシ。然  
ルニ水ヲ和シ煮テ飯トナシ。食膳ニ供シ。或ハ乾  
カシテ固塊トナシ。食ス。粒米ヲ生食スルハ不可  
ナリ。非常ノ大腹痛ヲ復シ。衰弱セシム。或ハ煮タ  
シ。米ヲ焙リ。食物ト為ス。一アリサヘリ。ウズ氏曰ク。  
余曾テ此ノ如キ米ヲ食シテ。日本ヲ旅行セシ。

アリ。久シク袖中ニ隠シテ生活セリト。田ニ在ル  
ノ插ハ多肉ノ葉アリ。ピースマク蒜ノニ異ナラス。  
然レ氏澗シ。地上ニ出ル一尺許。紫色ノ花アリ。重  
疊セル圓根アリ。プリニウス氏曰ク。印土人ハ如何  
シテ采ヨリ一種ノ油ヲ搾ルヤト。然レ氏當時日  
本及印土ニテ一般ニ采ヨリ酒ヲ製スルナリ。  
水口ヲ出テ一峻山アリ。大ニ旅具輸送ニ難ノリ。  
既ニシテ土山ヲ經テ。坂下ニ至リ一泊ス。  
翌朝日出一時前ニ月光ニ乘シテ上途ス。水及道  
上凍涸ス。久シクノ龜山ニ達ス。高擡アリ。雲ヲ衝

ク。城ノ四邊白石ヲ以テ築ク。極テ堅固ナリ。能ク  
損害ヲ免カル一シ。其下ニ立派ナル市街アリ。更  
ニ前行三里ニ石薬師ニ至ル。

○**全**午餉スルニ方テ。農夫及農婦ノ来テ蔬菜ヲ販ク  
アリ。農夫ノ衣服常人ニ異ナラス。犢ニ乘テ通行  
ス。犢鼻ニ貫クノ鉤ニ索ヲ繫ケ。兩角間ヨリ耳ニ  
沿テ之ヲ纏フ。此索ヲ以テ犢ヲ牽クヘシ。農婦ハ  
足下ニカラムポイ。草鞋ヲ云フカヲ踏ミ。拇趾ト第  
ニ趾トノ間ニ鼻緒ヲ挟ム。脚絆ニテ脚ヲ纏ヒ。紐  
ヲ交叉シテ結フナリ。

ソノ追分オワカ。四ツ市。及富田ヲ經テ。衆名ニ至  
ル。日没ニ此市ニ入レリ。人戸稠密ナル。大ニ他  
地ニ過ク。周圍ニ堅城アリ。高城アリ。石ニテ築ク。  
擡高ク聳ユ。

京都ト衆名トノ半道ニ盛ナル町アリ。ピオンゴ  
ト名ク。往年公方ノ薨後。信長ノ軍ノ為ニ大ニ潰  
破セラル。又千五百九十六年。大地震ニ於テ。半市  
ノ家屋。寺院。人畜。土中ニ埋没セリ。

日本ニハ屢地震アル。亞米利加ニ於ケルカ如  
シ。又千六百十九年二月四日。ベリユアーニセノトリ  
元和五年

ユキル。頻回震動セリ。則チ正午前ニ地震始マ  
リ。暫時間ニ震揺スル。百六十回ニ及ヘリ。而ノ  
連震十五日。更ニ空中彗星ヲ現シ。大ニ人ヲ驚怪  
セシメリ。

加拿太ノ地震亦頗ル劇シ。千六百六十三年二月  
五日。空中鳴動シ。次テ人家壁震ヒ。柱倒レ。樹木相  
觸テ。磨軋ス。三河市ノ森林アル。二山顛覆シテ海  
中ニ入り。中間ニ一堤ヲ作り。陸地ニ一新流ヲ現  
ス。又別ニ山頽レ。樹倒ルアリ。バウエル村ニテ  
ハ丘ヲ流没シ。河中一島ヲ現ス。日本ハ抑モ地震

多キ地ナリ。  
素名ヨリ水路宮ニ至ル。其間大ナル入海ナリ。水路ヲ取レハ陸行迂路スルニ比スレハ雜費少ナク。且時刻ヲ消スルノ短ナリ。小舟ヲ雇フノ十六艘。以テ旅具人馬ヲ送レリ。兩地離隔スルノ七里ナリ。海上風ナシ。故ニ中夜ニ始テ宮ニ達セリ。此地ハ繁華ニシテ家屋立派ナリ。寺院アリ。海岸ニ浴テ堅城アリ。宮ニ一泊ス。

○全千六百四十九年十二月二十四日。宮ヲ出立シ。鳴海及池鯉鮓ヲ經テ岡崎ニ至ル。此地ハ人家稠密。

城郭堅固ナリ。能ク強敵ヲ防クヘシ。此市ヲ經レハ一本橋アリ。長サ三百八十八步。旅具ヲ運輸スヘシ。茲ニテ午餉シ。藤川ヲ過キ。赤坂ニ達ス。道路極テ美麗ナリ。或ハ小流アリ。或ハ山アリ。平地アリ。總テ樹木多シ。  
○赤坂ニ一泊シ。十二月二十五日。御油ヲ經テ。吉田ニ至ル。又一大木橋アリ。吉田ハ頗ル美地ナリ。周圍ニ山アリ。樹木多シ。道路ノ兩側ニ巨樹アリ。上邊ノ枝相錯綜交叉シテ。旅人ノ為ニ兩ヲ防キ。又日光ヲ避ルニ足ル。

十時二川ニ至ル。此地ニテ鎮臺ノ一隊ニ逢ヘリ。  
譯官ノ説ク所ニ日本將軍ノ命ヲ奉シテ江戸ヨ  
リ大坂ニ在勤スルナリ。年々交代スルヲ例トス。  
前驢アルノ後鎮臺ハ輕騎ニ駕シ後從ニハ旅具  
アリ。歩卒アリ。騎馬士アリ。騎馬士ハ能ク習熟セ  
ル馬ニ騎ル弓矢長鎗更ニ双劍ヲ帶ク。一短一長  
ナリ。頭ニ菅笠ヲ戴キ脚ニハ漆塗ノ長沓ヲ穿ツ。  
歩卒及騎士運歩整齊肅然トノ一語ヲ吐ク者ナ  
シ。進行列ヲ為ス。殆ント半時程ナリ。

○十一月時白須賀ヲ經海濱ニアリ。右側ニ大海アリ。

左側ニ高山アリ。樹木多シ。白須賀ヲ過テ新居ニ  
達ス。是大海ノ入海トナル所ニテ其濶サ一里半  
但シ甚ク淺シ。故ニ旅具ヲ輸送スルノ易カラズ。  
舟底地ニ膠スルノ頻回ナリ。入海ノ前岸ハ舞坂  
ノ端ナリ。  
是ヨリ各種ノ丘ヲ經。兩側列樹アリ。日暮濱松ニ  
着ス。  
天明前途ニ就ク。舟ニテ天龍川ヲ涉リ見附ニ至  
ル。繁華ノ地ナリ。立派ナル城アリ。見附ヨリ袋井  
ニ至リ午餉ス。而ノ掛川及日坂ヲ經。日坂ニハ金

谷山アリ。長サ一里半。山路極テ美麗。兩側樹木多シ。

全此山ノ天頂左側ニ高大ナル寺院アリ。密樹間ニ堂宇高塔隱見ス。樹木ハ空中ニ聳ユ。日本譯官ノ説ニ是日本大學校ノ一ナリ。僧徒多シ。屋外ニ出ル。ナシ。常ニ學事ニ勉強ス。年々定時ニ諸方ヨリ全國ノ僧徒集會シ。佛教及理学ヲ討論研究ス。下但シ此話怪シムヘシ。絶テ一僧徒ヲモ見サルカ故ニ之ヲ譯官ニ詰ルニ其答辭曖昧ナリ。又何彌陀或ハ釋迦ヲ尊崇スル為ニ其身ヲ牲ト為ス

入水捨生

ナリ。故ニ日本人自死スル者多シ。其佛ヲ見シ。ナリ。大ニ願フ。片ハ自ラ其生ヲ滅スルナリ。則チ先ツ數日間施物ヲ集メ之ヲ洞キ袖ニ納メ。市中ニ出テ佛恩ヲ尊崇スルノ意ヲ説ク。衆人之ヲ善行ト看做シ之ヲ懲懣ス。是ニ於テ銳利アル鎌ヲ取り。往生スヘキ途ニ生スルノ荆棘ヲ刈除スルナリトス。既ニ小舟ニ乗シ。重キ石ヲ頸。臂。腹。及脚ニ繫キ。勇ヲ奮テ舟外ニ飛出テ。或ハ舟底ノ栓塞ヲ抜キ。舟ト共ニ水底ニ沉没ス。其舟外ニ飛出ル。片ハ朋友。及送者大ニ火ヲ投シテ

遺舟ヲ燒キ。以テ存生中善行ノ好果ヲ得セシム  
一シトス。

⑥ イエソイトロデウエーキフロシウス氏曰ク。余  
京都ニ赴カントスル片ヒエ島ヲ出テ。八日前ホ  
レ小市ニ来レリ。此地ニテ六男。二女。水死スルヲ  
聞タリ。人民海岸ニ接シテ之ヲ尊敬スル為ニ一  
堂ヲ造リ。柱ハ松樹ニテ構フ。堂内壁アリ多ク小  
杖ヲ挿ム。此小杖ニハ紙片ヲ懸テ。水死ノ靈ヲ阿  
彌陀ニ導カシムル為ニ。經文ノ語ヲ記ス。衆人日  
夜參詣禮拜スルヲリト。フロシウス氏曰ク。余口

デウエーキアルノイデト共ニ。其方ニ進ミタル  
ニ。五人ノ老婦アリ。堂ヨリ出テ来リ。蒿薇花簪ヲ  
執リ。口内ニテ喃々低語シ。余輩ヲ嘲弄シ。禮拜セ  
スシテ堂ニ入ルヲ制止ス。  
カスミルヘルア。千五百六十二年。塔ヨリ書ヲ  
寄ヌ曰ク。余自テ此ノ如キ水死ヲ見ル。數回ナ  
リ。抑モ日本人ハ極樂ニ往生スルヲ得ル片ハ極  
樂ハ或ハ海底ニアルヤ。或ハ他所ニアルヤ。固ヨ  
リ知ルヘキニアラス。唯其地ニハ各種ノ佛アリ  
テ。信者ヲ容レ。能ク之ヲ保存スト云フ。數日眠ラ

ス。常ニ盛膳ニ侍スト。此教法ハ間接ニ施物ヲ受  
ケ。他ノ同志ヲ募ル。最後ノ日ニ於テ。同黨寛詔シ。  
一盞ニテ共ニ飲酒シ。後舟ニ乗ル。此小舟中ニハ  
利鎌アリ。蓋シ極樂ニ赴クノ途中ニ在ル荆棘ヲ  
刈除スルノ用ニ供スト云フ。各人美服ヲ着ケ。袖  
裡ニ石ヲ滿テ。頸ニ重石ヲ掛ケ。以テ速カニ海底  
ニ達スルヲ期ス。余見ル所一回ハ七人黨ヲ為ス  
ナリ。共ニ勇ヲ鼓シテ海ニ入レリ。唯異状ヲ驚ク  
外ナシ。

之ヲ山武士ト稱ス。猶山野ニ廻歩スル兵士ト云  
フカ如シ。然レ此尊稱ヲ得ルニハ。頗ル困難ヲ  
經。苦業ヲ修メ。長時怠ラサルヘキナリ。長寛五十  
時ナルヘシ。ニ晝夜眠ラサルヲ云フ。粗食シ。奇異  
ナル撰生ヲ行フ。或ハ山林ニ住ミ。魔神ヨリ病者  
ヲ救フノ秘訣ヲ受ク。或ハ死者ヲ蘇生セシメ。巧  
ニ死テ起ストアリ。山武士ニ三月間苦業ヲ經テ。  
長寛断食スルモ妨ナキニ及テ。始テ同船スルヲ  
得ルナリ。則チ共ニ水底ニ沉没スルナリ。

兎日本人ハ死ヲ恐ル者ヲ好色人ナリトシ。又更ニ



不信心ナリトス。凡ソ阿彌陀釋迦。及他佛ヲ教法  
ヲ奉スル徒ハ。天堂説ヲ信スレハナリ。此説ハ近  
来日本ニノモ始テ行ハルニアラヌ。歐羅巴ニテ  
ハ千五百年代ニ既ニ唱フル所ナリ。信心者殊ニ  
死ヲ厭ハサル者ハ衆人一同ニ或ハ佛祖ヲ尊奉  
スルニ由テ短時ノ生活ヲ棄ル後永久ノ幸福ヲ  
得ルトスルナリ。セルテン〔此名ヲ冒ムル一キハ  
ゴリトユレス〕西班牙人ガルロイセルス。及獨逸  
人ナリ。ハ舊羅甸詩人リユカニユスノ詩ヲ唱テ  
北方ヲ見ル人民ハ。誤慮ニ由テ幸福ナリ。死ヲ

恐ルハ恐ノ大ナル者ニアラス。之ヲ軍神ニ捧  
ク。恐レスノ死スヘシ。他ノ嘲弄ノ為ニ生活ス。  
再来ノ生ヲ惜ム。然レモ別世界ニ於テハ精神  
能ク固有ノ体ニ入ルナリ。  
死後再生ノ説ハ。總テ釋教派ニテ一般ニ唱フル  
所ナリ。歐洲人ノ外ニモ往時ヨリ之ヲ唱ヒ今尚  
然ルアリ。西印土東印土共ニ然リ。此信實ナル証  
ハ舊時ノ東印土ニハ示ス所ナシ。ストラボハ証  
ヲノカステネスニ取ルインジセブラハマネス  
ハ。死ニ就テ議論紛起ス。生命ハ始テ受ケタル人

ノ現象ナリトセサル可ラス。然レハ死ハ世事ニ  
熟セル人ヲ真且幸ナル生ニ導クナリ。又ストラ  
ボハ舊ブラハマネスマシダニハノ話ヲ歷山王  
ニ附セリ。其凱戦ノ効ヲ奏スルハ。死ヲ尊フニ由  
ルトシ。安樂生活ヲ想像スルヲ望ム者ヲ足ニテ  
蹴ル。彼大聲ニ歷山王ヲ嘲リ曰ク。余決シテ汝ノ  
毒物ヲ要トスルヲナシ。何トナレハ汝自ラ飽キ  
タルニ非サルヘケレハナリ。余汝ノ脅迫ニ驚ク  
トナシ。何トナレハ生活スル印土人余ヲ養育ス  
レハナリ。然レハ死後ハ靈魂此老衰頹敗スルノ  
体ヲ脱シテ。更ニ佳ニノ清潔ナル別生活ヲ得一  
ケレハナリ。

九〇シセロ氏印土カラニユス。鍍金セル運輸スヘキ  
キニ就テ。藁ヲ被ヒ。徐々ニ手ヲ焼キ。曰ク嗚乎塵  
世ヲ脱シテ。幸福ノ地ニ赴ク哉ト。  
以上諸件ニ由テ上ニ記スル日本人ノ説ハ。嘗ニ  
古来ヨリ唱フルノミナラス。更ニ印土ニテ之ヲ  
唱ヒ之ヨリ支那ニ入り。日本ニ傳フル所ナルト  
容易ニ知ルヘキナリ。又前ニ日本譯官説ク所ハ  
一坊主致年間コイナ山ノ寺院内ニ集會シ。又屢

市中ヲ往來シ終ニ去テ行ク所ヲ知ラサルアリ  
ヘルレヲ書中ニモ記ス曾テ一坊主アリ塚ノ市  
中ニ住ス富饒ニメ信心ナリ齡七十歳重病ニ罹  
リタルニ午食後衆人ノ眼前ニ於テ形ヲ隱シ再  
後行ク所ヲ知ラス  
寺院ヲ左ニ見テ山巔ニ上リ之ヨリ下テ金谷ニ  
達シ一泊ス翌朝大井川ヲ涉ル久シク雨ナキヲ  
以テ容易ニ涉ルヲ得タリ蓋シ此川ハ高水急流  
ナル中ニハ之ヲ涉ルニ大ニ危険ナル所ナリ  
其前岸ヲ步行シタルニ偶將軍ノ鷹匠三人ヲ見

タリ將軍ノ威權ヲ帶フルヲ以テ騎馬ノ者ハ皆  
下馬セリ而メ使節ハ其人ノ過キ去ルマテ歩ヲ  
停メリ次テ島田藤枝及岡部ヲ經峻山ヲ越テ鞠  
子ニ達ス

少時ニノ駿河ニ至ル大城アリ但シ方今無住ナ  
リ故ニ紳士多クハ他地ニ轉移セリ蓋シ千六百

割腹自裁

二十九年職ニ就テ德川將軍ノ弟君薨去以後高  
業大ニ墮落セリ此君其兄ニ對シテ不滿ヲ懷ク  
カ故ニ止ムヲ得ズ割腹自裁スルニ至レルナリ  
此割腹スル状左ノ如シ東邦ノ習慣ニテ罪人ハ

脚ヲ折テ着坐シ。宮外用豁ノ地ニ於テ上身ヲ露  
裸シテ腹ニ至ル。其後側介錯人アリテ衰弱煩惱  
スル時ニ之ヲ補佐スルナリ。前ニ一人アリ。割腹  
スルノ刀ヲ授ケ。十二人ノ朋友。親戚列坐ス。介錯  
人ノ後ニ僧アリ。遺体ヲ葬ル為ナリ。更ニ兩側ニ  
警護ノ多人アリ。

九此ノ如キ残酷ヲ無罪ノ人ニモ加フルナリ。是  
國法ノ許ス所ナリ。則チ一人死罪ニ處セラルニ  
ハ連累多人ニ及ブナリ。フランコシスカロニ氏  
曾テ江戸ニ於テ見聞セシ一語ヲ記ス。一官吏一

地方ヲ幸セリ。過多ノ年貢ヲ収納セシメ。以テ自  
ラ之ヲ私シ。終ニ農夫ヲ貧困ナラシムルニ至レ  
リ。是ニ於テ裁官大ニ之ヲ糾弾シ。官吏罪ニ服シ。  
全族割腹ヲ命セリ。其一第ハ備後候ニ仕テ。江戸  
ヲ距ル一西。百四十六里。一伯父ハ薩摩ニ仕テ。更  
ニ遠キ一。二百里。一子ハ紀伊候ニ仕テ。第二子ハ  
東方。百十里ニアリ。松前候ニ仕テ。第三子ハ玉城  
イシクワノニ仕テ。季子ハ大坂巨商。某ノ女ニ昏  
ス。二第アリ。將軍ノ共カタリ。此諸人。其父或ハ其  
兄タル罪人ト。同日同時ニ割腹セリ。

此残酷ナル刑ヲ行フノ法左ノ如シ。預ノ其時日  
ヲ罪人ニ報シ。而ノ罪人北向シテ自裁スルノ状  
上ニ記スルカ如シ。

此連累ノ大政商人ニ及フヤ。最モ苛酷ナリ。其  
モ斫食スルノ十一日ニ及ヒ。終ニ餓死セリ。他ノ  
妻子ハ如何セシヤ。聞ク所ナシ。

カスベルヒルレラ氏。平戸ヨリ一書ヲ寄ス。曰ク  
千五百五十七年十月三十日。此割腹ノ事ヲ見聞  
弘治三年。是將軍ヨリ罪人ニ死ヲ賜フナリ。則チ使者  
ヲ送り。死スヘキノ時日ヲ領知セシム。罪人竄走

セヌ。謹テ使者ニ就テ。將軍ニ請テ自裁セシム  
求ム。既ニ許可ヲ得レハ。以テ無限ノ大菜ト為ス。  
定時ニ至レハ。貴重ナル劍ヲ執リ。腹ヲ上下左右  
ニ十字狀ニ割クナリ。然レモ將軍若シ自裁ヲ許  
サハルルハ。其子弟從僕及舊友ヲ呼ヒ集メ。屋内  
ニテ鬪戦スルナリ。則チ兵ヲ遣テ本罪人ヲ延キ。先  
ツ遠所ヨリ矢ヲ放チ。漸ク近クニ及テ鎗劍ヲ用  
フ。終ニ全族ヲ殲シ。永世報人タルヲ表ス。

流刑。

九三 但シ此ノ如キ處刑ハ貴人。武人。商人。紳士。及農人  
ニ施ス所ナリ。政府ニ對シテ詐欺スル者ハ皆自

裁セシム。血ヲ以テ刑スルハ日本ノ習慣ナリ。然レ氏高官ノ罪ヲ侵スハ之ヲ辱スルヲ極テ緩ナリ。則チ八丈島ニ追放スルナリ。是小島ナリ。周囲僅カニ一時行程ノミ。江戸ノ東ニアリ。相距ルハ百四十里。斬巖兀立シテ。碇泊スヘキ地ナシ。故ニ罪人ヲ送ルノ外他船ノ来ル者ナシ。好晴ヲ見テ僅カニ航スルノミ。危険言フ可ラス。其舟ヲ引拵クルノ状猶大工ノ棟梁ヲ架シ。足場ヲ組ムカ如クニ。綱ヲ引テ空中ニ登ラシムルナリ。此ノ如クスルニ非サレハ微風アルモ舟岩礁ニ衝突シ。

破碎スルナリ。此法ヲ設ケサルノ前屢舟ヲ損傷セシ所ナリ。

八丈島

柳モ八丈島ハ岩礁多シ。不毛ニ。播種スヘキ地ハ僅々ノミ。桑樹アリ。此島ニハ罪人多ク送ラレモ皆放免ノ念ヲ断チ。僅カニ生命ヲ保持ス。島ノ各所ニ番所アリテ。逃亡スル者ヲ監督ス。天氣ヲ候ヒ。毎月番人ヲ交代セシム。久シケレハ罪人ヨリ賄賂ヲ受クルノ恐アレハナリ。食物租悪ニ。少許ノ米。草根。野菜等ノ食ス可ラサル品ト。不潔水ナリ。房屋僅カニ身ヲ容ルノミ。冬日ノ严寒。夏

時ノ炎熱ヲ凌クニ適セス。更ニ年々絹布ヲ納ム  
ルヲ苦役トス。之カ為ニ多ク桑樹ヲ植ユ。以テ養  
蠶。織絹スルノ料ニ供ス。  
阿蘭使節駿河ニ逗留スルヲ久シカラス。此地ハ  
往時舊日本將軍ノ居城ニテ。後將軍ノ第住セリ。  
然レ此公ノ割腹セシ後ハ。復夕之ニ任スル人  
ナシ。市中大ニ衰微セリ。紳士多ク他地ニ轉移ス。  
堅城アリ。規模宏大ナリ。以テ往時ヲ追想スルニ  
足ル。  
駿河ヲ出テ江尻ニ至レリ。則チ憶起スルニ三十

八年前ニヤコツアスベキス氏。此驛ニ宿セシ。ア  
リ。是御所様ニ。阿蘭人ニ日本貿易許可ヲ給ハリ  
シヲ謝スル為ノ使節ナリ。終ニ江戸ニ至レリ。京  
都ニアル片馬十疋ヲ賜ハリ。且ツ所司代板倉播  
摩殿ノ添書ヲ持シテ。千六百十一年八月十日上  
達セリ。此日進行七里。草津ニ至ル。翌日土山ニ午  
餉シセスキユイノソニ宿シ。是ヨリ四日市ヨリ渡  
航シ。宮ニ至ル。日暮鳴海ニ着ス。此日炎熱灼クカ  
如シ。大ニ疲勞ヲ覺。次テ岡崎ヲ經テ吉田ニ至  
リ。藤枝鞠子ヲ過キ。日暮駿河ニ着セリ。

スベキス。  
トテルセルスゾーシ。  
駿河ニ於テ御所様  
拝謁紀事。

阿蘭使節スベキス氏。及ニトテルセルスゾーシ。  
ン氏ノ到着ヲ直チニ執政コセキユエントノ。及  
イコト在三郎殿ニ報告シ。速カニ將軍ニ拝謁セ  
ン。トテ請フニ。懇篤ノ答詞アリ。曰ク。遠路ヲ經過  
シ来ル。勞苦察スヘシ。將軍モ必ラス汝ノ到着ヲ  
満悦スヘシ。明朝速カニ將軍ニ奏スヘシ。コセキ  
ユエントドノ。又曰ク。明後日阿蘭使節登城スヘシ。  
但シ謁見ニアラス。將軍ハ其代官役ニ就テ重大  
ノ積算ニ自ラ從事シ多務ナレハナリ。  
駿河ニ着スルノ後。少時前ニ葡萄牙使節拝謁ノ

葡使拝謁。

時ノ所置振りヲ聞クヲ得タリ。此使節先ツ口演  
シ。後ニ書面ヲコセキユエントドノニ捧ケリ。是靴  
政ノ長ナリ。其後御所様ニ拝謁ス。献上スル所ハ  
金彩アル羅紗十枚。金盤一枚。時計臺アル者一個  
ナリ。將軍此諸品ヲ嘉納セリ。然レモ將軍自ラ一  
語ヲ交ユルニアラスノ。使節退去ヲ命セラレ。頸  
ニ金鏈ヲ纏ヒ。翻縁ノ天鷲絨ニテ外貌ヲ裝飾ス  
ルニ係ラサルナリ。譬諭ノ語意不詳。接スルニ外  
ニ係ラス待遇簡易。使節述ル所ノ意ハ日本人三  
年前ニ瑪港ニテ人ヲ殺セリ。敢テ其言譯ヲ請フ。



又長崎ニテ西班牙大船焼カレタル歎訴ナリ。此  
時蒙ムル所ノ損害百萬ジユカレテナリ。就中  
之カ為ニ我蒙ムル所ノ損害最モ大ナリト説ク  
所此ノ如クナリシニコセキユエンドノ答テ曰  
ク舟子及軍卒瑪港ニテ惡業ヲ為ス。豈ニ我政府  
ノ因リ知ル所ナランヤ。軍卒ハ粗暴ナレハ誰人  
ニ敵對スルヤ謀ル可ラス。汝宜シク時ニ臨テ憂  
置スヘキナリ。

呂宋使節大失敬ヲ為セリ。則チ先ツ江戸ニテ幼  
將軍ニ謁シ。次ニ駿河老將軍ニ謁セリ。此時一旗  
ヲ立テ西班牙記章ヲ表シ。銃手四十人。横柄ニ駿  
河ヲ過キ各街ニ於テ銃ヲ放チ。喇叭ヲ吹キ。鼓ヲ  
鳴ラス。コセキユエンドノ進物ヲ返附ス。使節將  
軍ニ請フ所四條ナリ。曰ク呂宋人ニ日本適宜ノ  
地ニ於テ船ヲ造ルヲ許ス。其港ノ海岸ヲ測量  
スル。阿蘭ノ商船ヲ總テ禁スル。然ルモハ西  
班牙王日本ニ船ヲ送り阿蘭ノ諸船ヲ討ツヘキ  
事。呂宋人ノ商業ニ於テ日本監察ヲ附セス。自在  
ニ賣買シ得ル。以上呂宋人先ツ口上ヲ以テシ。  
後ニ筆記シタリ。將軍ニ拜謁スル前ニ逗留スル

十五日ナリ

九四スベキス氏及セーゲルスゾーシ氏殿中ニテ徘徊スル一二時間コセキユエンドノニ逢テ將軍拜謁スルニ故障アル所以ヲ聞ク彼朝スルニ他日ヲ以テス両氏更ニ金銀及担税頭オト庄三郎ニ接セリ此人ハ親切ニノ能ク注意スル人ナリ一二ノカルモセーネ羅紗ゴロフクレングマステン硝子罍カラベーン薬角ヲ漆フ者ヲ呈セリオト進物ヲ納レ使節ヲ周旋スヘキヲ約セリ且問テ曰ク合衆阿蘭國ハ如何シテ十二年

間西班牙王ト戦ヘリヤ此時如何シテ勝ヲ得タルヤ阿蘭人ハ準備ヲナクノ能ク呂宋船ヲ掠奪スルヲ得タルヤト又コセキユエンドノニサナカラサル進物ヲ呈シタルニ遠路旅行多事ナルヘキニ此ノ如キ配慮ハ我ニ要ナシトテ返附セリ

又両使ニ向テ曰ク將軍ニ請願セントスルハ何等ノ事件ナルヤ試ニ之ヲ述ヘヨ

阿蘭船日本ニ在船スルヲ得ンナリコセキユエドノ彼此大ニ使節ノ為ニ配慮シ曰ク余預メ

之ヲ將軍ニ言上スヘシ。必ラス意ヲ達シ得ルヲ  
疑勿ルヘシ。尚拜謁ヲ俟テ使節自ラ之ヲ請求セ  
ハ完成スルニ至ルヘシト。兩使更ニコセキユエ  
ンドノニ懇請スルヲアリ。則將軍ノ免許狀ナリ。  
是阿蘭船渡来シ。日本港ニ於テ隨意ニ貿易スル  
ヲ得ル。其荷物ヲ平戸ニ卸ス。片ニ監察ヲ要セ  
サル。將軍ノ意ニ應シテ一地方ヲ定メテ異國  
人在昌スル。コセキユエンドノ一々其理由ヲ  
向テ曰ク。將軍之ヲ容ル。アルヘシト。後ニ一二  
合衆阿蘭國政度ニ向及。ノ。アリ。次テ曰ク。午後

將軍ニ言上スヘシト。相約シテ別レリ。  
ウイルヘムアダムスハ。使節ニ隨從シテ。此時戸  
外ニ在リタルニ。此人東印度商會ノ命スル所ニ  
テ。駿河ニ逗留スルナリ。呼度サレ。進物ヲ使節ニ  
返附セシメントセリ。抑モ日本人ハ異國人ノ進  
物ヲ一切受テサルノ慣例ナルニ。アラス。既ニ葡  
萄牙及呂宋使節ノ進物ヲ納レ。且更ニ外國商人  
ヲ大ニ優遇スルナリ。而ノ曰ク。スベキス氏。セ  
ゲルスゾ。ン氏。我カ親交好意ヲ疑ハサルヘシ。  
今進物ヲ多ク受クルモ。固ヨリ同一ナリ。我ニ此

ノ如キ例ナシト。ウイールへハアダムス氏之ヲ固  
拒シテ曰ク是豈ニ進物ト称スルニ足ランヤ聊  
カ阿蘭國産ノ粗品ヲ呈シ親交ヲ得ルノ喜ヲ表  
スルノミ願クハ之ヲ容レヨコセキエエンドノ  
曰ク是常例ニ非サレト今之ヲ嘉納スト終ニ全  
額ヲ収ム。

午後少時スベキス氏及セーゲルスゾーシ氏ハ  
コセキエエンドノノ約ノ如ク將軍ニ拜謁スル  
ヲ得各呈品ヲ各臺ニ載ス則チカラフ紅色及  
カルムースネ羅紗黑色平滑ナル天鵝絨カルム

九

ヒーン紅色カルサイ水浸カメロツテシ全彩ア  
ルサテーンダマストノールデンビユルグカル  
ニツテシ硝子罍鉛數斤長サ八尺ノ大炮剛銃ニ  
百斤カラベーンニ披各葉角象牙五本ナリ使節  
敬禮ノ式ヲ行フ將軍我カ安全ヲ祝ス後同アリ  
曰ク阿蘭人ハ何故ニ兵卒ノ勢ヲモルリユシセ  
島ニ置クヤ阿蘭人ハ波羅ニ貿易スルヤ此地ニ  
ハ上好龍腦ヲ産ス是何レヨリ来ルヤ今言フ所  
ノアギエテ及カラムバハ何ノ邊ニ在ルヤ佳香  
アル本ハ阿蘭ニ生殖スルヤ何レカ敢モ高價ヲ

ルヤ。

既ニノ將軍譯官ニ由テ。使節ニ退去スヘキヲ命  
セリ。使節則チコセキユエンドノ。及庄三郎殿ニ  
誘ハレテ。室外ニ退出セリ。是非常ノ優遇ニ出ル  
所ナリ。此ノ如キ懇親ハ。屢三百ジユカトテ。テ  
捧クル所ノ日本大諸侯ニ於テモ。決シテ能ハサ  
ル所ナリト云フ。彼ノ葡萄牙。及呂宋使節ノ如キ  
ハ。將軍敢テ一言ヲモ賜フヲナキナリ。是ニ於テ  
ウイルムアダムス氏。再ヒ呼戻サレ。將軍進物  
ノ謝辭ヲ述ヘ。且ツ曰ク。我阿蘭人ノ高業ト戦争

蘭使江戸行

トニハ精熟ナルヲ悟ルト。  
スベキス氏。及セーゲルスゾーシ氏。日本文ニテ  
書ヲコセキユエンドノニ呈シ。江戸ヨリ再来ス  
ル時。尚注意ヲ求ムヘキヲ請フ。蓋シ江戸ノ幼將  
軍ヲ祝スルハ。彼注意ニ出ル所ナリ。曩ニ呂宋使  
節既ニ之ヲ行フ所ナリ。則チ慶長十一年八月十  
八日。途ニ就ケリ。コセキユエンドノヨリ。道中案  
内狀。驛馬十疋。人夫若干。渡船場等。江戸ニ至ルマ  
テ。公用旅行ノ報告ヲ賜フ。兩使ハ途ニ就ケルニ  
迅雷電光暴風ニ遇フ。止ムヲ得ス。江尻ニ一泊ス。

千六百四十九年十二月二十七日ナリ。寒減凜冽  
慶安二年ナリ。翌日沖津ヲ過キ川ヲ涉リ由井驛ニ達ス。山  
麓海岸ニ沿フ岩礁アリ尋常通路ハ岩礁ノ尖端  
ト其間隔二尺ノミ其下ハ狂濤怒號シ進歩極テ  
難シ。塩田ヲ設クルト多シ日本式ニ據ル塩ヲ  
製出スルト多シ。全國ノ用ニ供ス。  
路傍彼此ニ村落アリ板ニテ構フノ茅屋アリ其  
内癩病人アリ極テ貧困ナリ。挽ト籠トノ外一物  
ヲ有セス。或ハ枕アリ卧用ニ供ス。屋頭ニ鈴ヲ掛  
ケ旅人ノ通行スルヲ見テ之ヲ鳴ラシ錢ヲ乞フ。

錢餓ヲ告テ憐ヲ求ム。然レモ村内ニ入ルヲ許サ  
ス。是此病不治ニシ。且傳染ノ恐アルヲ以テナリ。  
故ニ此悲酸スヘキ景況ニ陥リタルナリ。此癩病  
ハ東方諸國ニテハ北方諸國ヨリハ劇シヘ口ド  
チユム氏曰ク波斯人ハ癩病者ヲ常人ノ住居外  
ニ追放ス。蓋シ此人ハ太陽ニ對シ重罪ヲ犯シタ  
ル不信心者ナリトスレハナリ。  
由井ヨリ蒲原ヲ過キ富士川ヲ涉ル茲ニ富士山  
ヲ見ル馬背ヨリ荷物ヲ卸シ小舟ニテ之ヲ運輸  
ス。為ニ多時ヲ費ヤシ日午吉原驛ニ達ス。午食間

村人ノ話ス所ヲ聞クニ富士山ハ直峻ニ他山  
ニ異ナリ。三十里外ヨリ望ミ見ルヘシ。終年雪ヲ  
九六冒ムル山伏アリ。年々登攀スルニ回。通常同行三  
千人山上ニ留止スル。十六日。断食及諸難行苦  
業ヲ修ム。此ノ如クスル中ハ其人恐ルヘキ魔神  
ヲ見ル。ヲ得ルナリ。之ヲ拜スル。一食頃ナレ  
ハ。自他共ニ大ニ神聖ヲ得タリトス。依テ山伏ノ  
規則ニ據リ。領ニ白色ノ袈裟ヲ掛ケ。黑色ノ小帽  
ヲ前額ニ置クヲ得。此山伏ハ日本全國ヲ巡廻シ  
己ノ信スル所ノ神ヲ祈念ス。小銅盤ヲ携ヒ之ヲ

山伏加持占法

鳴ラシ。其来ルヲ報ス。頭髮ハ縮束ス。之ヲ信スル  
人ハ彼ヲシテ貸賤ノ紛失。或ハ隱匿スルヤヲト  
セシム。  
之ヲ行フ式左ノ如シ。一童子ヲ地上ニ坐セシム  
ル。東方風俗ノ如クス。是ニ於テ魔ヲ呼テ童子  
ノ魂魄ヲ轉換セシム。既ニノ童子口ヨリ泡沫ヲ  
噴キ。眼ヲ旋回シ。身ヲ輾轉スルニ至レハ。山伏童  
子ニ向テ紛失品ノ所在ヲ詰問ス。童子則チ何ノ  
所ニ於テ何ノ人何ノ日時ニ隱匿スルヲ明言ス  
ルナリ。

山伏ノ外別ニ町村ヲ通過スル山坊主ナル者アリ。是他ノ病苦ヲ加持スル者ナリ。則チ晝夜病床ニ侍シ。祈念讀經ス。其文意解ス可ラス。諸神ニ向テ世上通用字ニ異ナル異形ノ字ヲ書シ。以テ之ヲ机上ニ排列ス。一シリキハ一ゲナール氏ハ自ラ各様ノ山坊主ヲ見タリ。其領ニ白珠ヲ貫クノ長索ヲ掛ケ。眼ヲ旋轉シテ見サルカ如クシ。可恐容貌ナリ。

九七  
ハ一ゲナール。曾テ一日古法ヲ修スルノ山伏ヲ招キタルニ。彼尋常式ノ如ク。久時誦經シテ後

答フ。彼及ヒ傍人ニモ誰氏アルヲ見ルニアラス。汝何故ニ敢テ余ヲ苦責スルヤ。余汝ノ余ヲ苦責スル所以ヲ解セス。然レモ汝ニ歎スル一人。余ニ語ルアリ。汝ヲ責ムヘシト。是ニテ満足セリ。余今去ルヘシト。

山伏ノ説ク所。其教徒中一種ノ語ヲ用フ。尋常凡人ノ悟ラサル所ナリ。太古ノセルチセドロイデニス氏ヨリ出ルナルヘシ。是ゴツテンノ徒ナリ。則チスカヒ一スウエーデンノールウエーゲン及スコトネンハ。往時之ヲ知レリ。ヨリ生シ其領



地タウナシスヨリ既日土ニマテ侵入シ。是ニ於  
テ王ヘソシスヲ殺セリ。勝ニ衆シテ更ニ上部  
細亞ニ進ノリ。セーリユスダリウスセルセス  
ナナル。新更ニ壘山王ヲモ服從セシメリ。次テ印  
土。及支那ニ蔓延セリ。ドロイデルス氏ハゴ  
ンノ宣教者ナリ。  
改ニインジアーンセブラマネスセルチセドレ  
ーデルス。及日本僧トノ間ニ大ニ相同シキ所ア  
ルナリ。希臘記者ジオゲネスラエルチウス氏曰  
クインジセゲームノソボステントドロイデル

ス氏トハ曖昧ニシテ深奥ナル謫言ヲ全世界ノ  
學者ニ講究セシメリ。曰ク人ハ神ヲ尊敬セサル  
可ラス。決シテ惡事ヲ行フ。勿ルヘシ。勇氣ヲ養  
フヘシト。ホトポニウスノラハ殊ニドロイデル  
ス氏ヲ證トス。其生徒ノミニ秘奥ヲ示ス。故ニ凡  
人ハ唯之ヲ誦シテ靈魂不死ヲ知ルノミ。此沉默  
ハ嚴ニ誓約スル所ナリ。セルテニウス氏誓文ヲ  
記スル。左ノ如シ。ドロイス氏ハ其生徒ニ約シ  
テ曰ク。余汝ニ誓フ。此日月星辰及周回萬物ヲ以  
テ保証トス。汝此事ヲ不學。不信ノ徒ニ輕々説示

スルヲ勿ルヘシ。唯師恩ヲ顧念シテ。敢テ之ヲ辱  
カシムルヲ勿レ。神ハ沉默ヲ主トスト。フランシ  
スキユスサヘリウス氏ハ之ヲ排毀ス。何トナレ  
ハ印土ニアル一少年。ブラノネス氏。サヘリウス  
氏曰ク。余兩人ノミナルハ。余秘事ヲ解セリ。是其  
教師前以テ彼ニ約スル所ニテ。彼亦決シテ此秘  
事ヲ發言セシニアラサレハナリ。又イリウスカ  
トサルノ説ニテハ。トリユイデスニ於テ保持ス  
ル教法ハ外國ノ音ヲ教フルト極テ多数ナリ。之  
カ為ニ殆ント二十年ヲ費ヤスヲ要ス。而ノ之ヲ

筆記スルヲ許サス。止ムヲ得サレハ希臘文ヲ以  
テス。而ノ日本山伏モ其教徒通用スル一種ノ異  
語ヲ用ユ。常人ノ関カリ知ル一キニアラス。猶往  
古ドレトデスノ如シ。獨ニ語ノ外。教法及理學上  
ニ於テリユニユセ語ヲ用フ。是亦大ニ獨逸語ニ  
異ナリ。

日本ノ山伏ハ。群ヲ為シテ諸所ヲ徘徊スルアリ。  
之ヲハルボリボンシト名ク。路上彼此ニテ阿  
蘭使節ニ追歩シ。施物ヲ請フ。此ノ如ク為サハル  
中ハ山林ニ入り。洞窟ニ住スルト。恰モ地下ノ昆

其ノ葡萄スルカ如シ。之ニ對スレハ驚ク一キ人  
ナリ。其帽コロイセリングハ樹皮ヲ以テ編ミ製  
ス。帽夫ノ飾リニハ黑色ノ馬毛。或ハ野牛毛。或ハ  
長キ鳥羽ヲ附ス。腹ニ堅キ心アル帶ヲ纏フ。上衣  
ハ水綿製ナリ。羊臂ニ及ヒ肘ニ達セズ。下衣ハ野  
牛皮ニテ製ス。食器ニハ組紐ヲ繫テ帶ニ結フ。左  
手ニハ太キ遊歩杖ヲ執ル。野生ノスータンダ木  
ニテ製ス。此水ハ實ヲ結フ。歐洲ノミスプレニ  
異ナラス。履ハ紐ニテ跗上ニ固繫ス。四枚ノ大ニ  
ノ廣キ鍍齒アリ。恰モ石道ヲ過クル馬鍍蹄ノ如

シ。頭髮頷髭叢生シ。紛亂錯綜シ。空テ肩ヲ蓋ヒ。胸  
ノ半ニ至ル。其容貌怪獸ニ似タリ。三十歳ニ至テ  
始テ魔ヲ驅ルノ人トナル。  
使節。又別ニ占者ゲレグウスニ逢フ。此人ハ幼術  
ヲ修メ盗賊ヲ知り得ルノ術アリ。常ニ山頂小舎  
ニ住ス。其面貌正視スヘカラス。蓋シ平日暑寒風  
雨霜雪ニ曝露スレハナリ。同黨ノ女ヲ娶リ婚ヲ  
結ス。  
口デウエーキフロシウス氏。千五百六十五年ニ  
月二十六日。京都ニテ遇フ所ノ占者ノ事ヲ記シ。

看官ヲシテ其狀ヲ領知セシム。此ゲンギウスハ  
頭ニ一角ヲ生ス。魔曾テ彼ヲ誘テ某山ニ頂上ニ  
攀登セシム。定時間茲ニ留止ス。既ニノ魔ノ至ル  
アリ。或ハ日午ニ於テスレモ多クハ日暮ニアリ  
ゲンギウス輩ノ集會スル所ニ現ス。或ハ誘テ不  
可測ノ深谷ニ入ル。此時僅カニ之ヲ拒ム者アレ  
ハ。則チ之ヲ殺ス。一老人アリ。大ニ魔ヲ信ス。其子  
之ヲ信セサルヲ以テ。魔ヲ逐テ山上ニ至ル。一  
能ハス。路上偶一少年ニ逢フ。共ニ進テ山頂ニ至  
ラントシタルニ忽チ地獄ニ陥リク。魔ハ一貴

人ノ狀ヲ現ス。老人之ヲ尊敬スルニ。其子ハ弓ヲ  
引テ魔ヲ射ントシタルニ。是貴人ニアラス。一  
狐ヲ射タリ。少年ハ傷獸ノ血痕ヲ逐テ峻山上ニ  
至リ。其巔頂ニ立ツニ。脚下ニハ無数ノ骨體ヲ見  
ル。蓋シ共ニ魔ニ誘ハレタルゲンギウスノ遺骨  
ナリト

九九 然レモ今言フ所ノ驅魔人古者及ヒ盜賊ヲ察ス  
ル人ハ日本山坊主ハルボルボンシ。則チゲン  
ギウスノ所業ナリ。日本人ハ此術ヲ數百年來掌  
ト知ル所ニテ。其源ハ亞細亞他方ヨリ。海ヲ超テ

来ル所ナリ。蓋シ占トハ二千年以外ニ於テ。全東  
方ニ大ニ流行シ。而シテ各様ノ別アリ。又其術ヲ施  
行スルニ各様ノ器械ヲ以テス。水。硝子。鏡。油。輪。火。  
小兒。妊婦。鳥等ナリ。

最モ尋常ハ事ノ将来ノ吉凶成否ヲ知ラントシ。  
又紛矢品ヲ探索スルニアリ。此時一盃ニ水ヲ盛  
テ。之ニ別徴アル金銀版。及寶石ヲ投シ。此盃ニ向  
テ呪文ヲ唱ヒ。魔ヲ呼フナリ。預備既ニ終ル。則チ  
水ヲ見テ決テ取り。以テ問題ニ答フルナリ。  
又占者圓鑿ニ鮮明液ヲ満テ。周圍ニ蠟燭ヲ點シ。

喃々呪詔魔ヲ招ク。既ニシテ其索ムル所以ヲ問フ。  
且點シテ小兒。或ハ妊婦ヲ鑿ニ向ハシメ。而シテ水  
ヲ靜視ス。硝子鑿ニ映スルノ小兒。或ハ妊婦ノ像  
ヲ視テ。後問題ニ答フ。  
又鏡ヲ用フル方アリ。此時喃々呪文ヲ唱ヒ言フ  
「アルニ似タリ。カイサルニジウスユリアニユ  
ス。此類ノ鏡ヲ用ヒ。所願ヲ映視ス。  
バウサニアスハ。希覬記者ナリ。一井ヲ以テセル  
ス。神ノ殿堂ナリトス。此井中ニ細キ紐ニテ鏡ヲ  
繫キ。沉ノ重病アル人ヲモテ。自ラ之ヲ映視セシ

ムルニ其鏡面屍ヲ見ルハ事成ラズ健康人ヲ見  
ルハ回復スルノ徴トス

又油ト煤トヲ用フル方アリ其二品ヲ調和シ不  
穢ノ少年ホタテ淫情ヲ云フ發動セノ爪上ニテ焼クナリ

既ニノ日光ニ映シテ爪上ノ焼痕現状ヲ見テ以  
テ吉凶ヲトスルナリ

又占者金環ヲ指間ニ掛ケ之ヲ水中ニ入テ旋回  
シ其旋轉ノ状ニ由テ事ノ成否ヲトスルナリ

又静定水中ニ三個ノ石ヲ投シ三輪相重疊スル  
ノ状ヲ見テ事ヲトスルアリ

ハルロ氏ハ羅旬語ヲ通知スル人ナリ一少年ヲ  
シテ水中ニテ十五詩句ヲ誦セシメ以テ羅馬ト  
ミトリゲテストノ間ニ起ルヘキ長軍ノ初中終  
ノ景況ヲ前知セリ

○ラエーニセ市エビタミユスニ接シテユノ沼  
澤アリ之ニ麵包ヲ投シテ以テ吉凶ヲトス其保  
存スルハ吉ニノ消滅スルハ凶ナリトス

又重折スル布中ヲ頭上ニ置キ更ニ滴壺ノ水ヲ  
載ス而ノ咒文ヲ唱フルニ其水熱沸スルハ吉寒  
冷ナルハ凶ナリ

盜賊ヲ探知スルニハ日本僧山伏ゲンギウス各  
種ノ幻術ヲ行フ。是二千年前ヨリ亞細亞ニ流行  
スル所ナリ。斧ヲ臺上ニ置キ。咒文ヲ唱ヘテ一々  
人名ヲ呼フ。既ニノ盜者ノ名ニ至レハ斧或ハ旋  
回シ。或ハ震搖スルナリ。  
篩ヲ用フルモ亦相似タリ。劃刻アリ之ヲ指間ニ  
挟ミ。咒文ヲ唱フドウウイマドウウイマエレナ  
ムノマウスト。後其劃刻ノ數ヲ計算シ篩ヲ旋回  
スレハ盜ニ至テ止ム。  
又驢馬頭ヲ炭上ニ置キ。咒文ヲ誦シテ之ヲ燒ク

ノ一法アリ。占者之ヲ嘗ムルニ美味ナレハ一廣  
地ニ於テ其炭碎片ヲ撒ス。各々字形ヲ現ス。後久  
時禁食シタル雞ヲ放テ其啣ム所ノ炭片ヲ集メ  
寄テ語ヲ爲セハ盜ノ果ノ誰タルヤヲ判決スル  
ニ足ルナリ。  
又更ニ奇異ナルハ人頭ヲ火中ニ投スルナリ。又  
薰物ノ香臭鳥ノ飛狀啼色狼吠犬聲蜂飛又氣中  
ノ返響員數計算。圖取占夢。幽靈。遊魂。觀掌。透光。望  
星。遊星等ニ由テ事ヲ判スルアリ。  
舊希臘人ハ皆波斯ノソロアステル氏ヲ以テ此

幼術ノ鼻祖トセリ。然レモセルシユスヲ尊信ス  
ルオスタネス氏以後ハ。歐羅巴ニテハソロアス  
テルヲ排棄セリ。ペニシールスアボルロニカカ  
ヒチデネス。及ダルダニユスハ多クハデモクリ  
テスヲ主張ス。先哲ノ語ニ曰ク。アシリールスカ  
ルデーションセル。及東方ニテハ。支那及韃靼ヲ  
古者ノ始祖トス。是ヲ以テ考フレハ。日本ニテハ  
未タ釋教ヲ奉ヒサル前ニ於テ。既ニ此法アリタ  
ルニ。一時衰微シ。後再ヒ歐羅巴ヨリ原地ニ再入  
シタルト疑フヘキニアラス。

阿蘭使節フリシウス氏。及ブルークホルスト氏  
ハ。午食シ。一身快活トナリ。且日本山伏ノ此高峻  
ニ。終年雪ヲ冒ムル富士山ニ攀ルノ珍話ヲ聞  
テ。意氣爽快トナル。吉原驛ヨリ砂道ヲ過テ。原驛  
ニ至レリ。常道ハ粗砂多キヲ以テ。別路ヲ取り。海  
岸ニ沿テ。沼津ニ至リ。進テ箱根ノ麓ナル三島驛  
ニ至ル。三島ニ至ルマテ。道路平坦。兩側樹木多シ。  
三島驛ハ八ヶ月前ニ焚燒セルヲ以テ。全街皆新  
築ナリ。一泊ス。  
翌朝更ニ數馬ヲ雇フテ。阿蘭人及日本人之ニ跨



り。箱根ニ赴ケリ。此馬勇壯ニノ。此險路ニ慣ル。致  
村ヲ經。難路ヲ過テ。箱根驛ニ達ス。驛ハ山間ニア  
リ。四望皆山ナリ。湖水アリ。舟ヲ泛フ一シ。但シ魚  
ナシ。此水深キ一七十尋。八十尋。又九十尋。或ハ百  
尋ニ及フ所アリ。

○午食後驛外ノ關門ヲ過ク。建築堅固ナリ。貴族ニ  
非サルヨリハ。乘馬。乘輿。通過スルヲ許サス。門ノ  
兩側ニ番所アリ。内ニ四角ノ室アリ。適宜ノ臥室  
アリ。壁ニハ鳥銃。弓矢。及劍鎗ヲ排列シ。番卒ハ地  
上ニ坐ス。

孟蘭盆精靈ヲ祭ル

驛ヲ出ル。遠カラスノ。水瀕ニ三堂アリ。旅人之ニ  
詣シニ。三ノ札ヲ投スルニ。其札直チニ水中ノ石  
間ニ出ツ。此ノ如キ夢ニ似タル慰ニ由テ。其朋友  
ノ靈魂自在ニ。此水ヲ飲ムヲ得ルト謂フナリ。  
○三通例靈魂ヲ祭ルハ。八月ニ於テ。二日間之ヲ修ス。  
其式左ノ如シ。夜中各様ノ画彩アル燈ヲ簷端ニ  
掲ケ。市中或ハ野外ニ出ツ。蓋シ信心者アリ。又遊  
觀者アリ。暗ニ乘シテ外出シ。迷遊セル靈魂ヲ迎  
フ。通好ノ地ニ至テ。敢テ有形物ヲ見ルニ非サル  
モ。之ニ逢フト假定シ。之ニ向テ告テ曰ク。善ク奉

レリ。善ク来レリ。余待ツ。既ニ久シ。請フ休息セ  
ヨト。則チ為ニ食物ヲ供ス。又曰ク。遠路来着疲勞  
寮スヘシト。米。果實。及他ノ食品ヲ。地上ニ排列ス。  
然レ。且温湯ヲ供スル。ナシ。饗應スル。一時頃  
ニノ。則チ食シ終ルト為シ。延テ我家ニ誘ヒ。之ヲ  
清室ニ請シ。盛膳ヲ供ス。此ノ如クニシテ。既ニ二  
日ヲ經レハ。街上炸火ヲ焚キ。靈魂暗夜歸路ニ迷  
フヲ照ラスナリ。既ニノ衆人皆歸家スル。片家脊  
ニ瓦礫ヲ投シ。靈魂ノ遺存隱匿スルヲ防クナリ。  
何トナレハ。靈魂逗留スル。二日以上ニ亘ル。

アレハ。復ヒ極樂ニ赴クノ機會ヲ失シ。地獄ニ至  
ルヘケレハナリ。今炬火ヲ焚ク。盛ナルハ。風雨  
アルモ。路ニ迷ヒ。歩ヲ失スル。勿ラシムル為ナ  
リ。

○**重**使節ヒリシウス氏。及ブルークボルスト氏ハ。箱  
根関門ヲ出ルニ。久シカラヌノ險路ニ臨ノリ。既  
ニノ其巔ニ至ルニ。屢危キヲ經タリ。歧道ハ。岩石  
ニノ其幅ニ尺ニ過キサル狭窄ノ所アリ。一方ハ  
峻山天ヲ衝テ高ク款テ。一方ハ深谷測ル可ラス。  
一步ヲ失スレハ墮落ヲ免カレヌ。不幸ニシテ。

シウス氏ノ一僕。歩ヲ失シ。路外ニ倒レリ。然レモ  
馬ノ手綱ヲ握リ。之ヲ攀テ僅カニ本道ニ至ルヲ  
得タリ。日暮小田原ニ達ス。此地ハ美街ナリ。側ニ  
城アリ。周回石ニテ築ク。櫓高ク聳ユ。日本人ノ小  
田原ニテ話スヲ聞クニ。此地數年前大地震アリ  
テ。彼此ノ地最モ震動劇甚ナリシ。人家櫓寺及全  
城ヲ顛覆セリ。地上恐ルヘキ穴ヲ穿テリ。然レモ  
汚泥湧出シテ。忽チ此穴ヲ塞ケリ。今日ノ人家ハ  
此汚泥上ニ築ク所ナリ。  
然レモ此ノ如キ地震ハ。日本ニテハ敢テ珍事ニ

地震ノ説

アラス。或ハ全市。全國顛覆スルナリ。又沈没ス  
ルナリ。箱根驛モ往時ハ立派ナル市街ナリシ  
ニ。數時間ニ埋没シ。人畜家屋共ニ烏有ニ歸セリ。  
今日阿蘭使節ノ通過セシ無限ノ深谷ハ。則チ此  
大地震ノ遺跡ナリト。  
日本人ハ地震ノ原因ヲ説クニ。衆論紛々ナリ。尋  
常世人ノ信スル所ハ。妄談ノニ。白ク海中ニ一大  
鯨魚アリ。其尾ヲ奮テ洋ヲ打ツ。其力猛劇ナリト。  
往時希臘及羅甸ノ理學家。此地震ノ原因ヲ説ク。  
亦諸家一ナラス。是人智蒙昧ニテ。地震ノ真理ヲ

悟ラサルニ因ル

余。今ブラット氏及セネカ氏ノニ説ヲ掲クヘシ。甲  
氏曰クアレテニセルスノ舊説ヲ守ル。恐ルヘ  
キノ地震ト水ノ晝夜流去ニ由リ。今日尚地中海  
ニ於ケルカ如ク。汝ノ祖先埋没セリ。而ノアトラ  
ス島ハ大海中ニ其頭ヲ没セリト。ヒ氏曰ク全國  
ハ破裂スルナリ。故ニ海ヲ隔テ陸地アリ。西班牙  
ト亞弗利加トヲ海ニテ分テ。西悉里ト以太利ト  
ヲ割キ田畝モ地震ノ為ニ沉没湮滅セリ。地中ニ  
密鎖スルノ風氣逆去セントスルニ途ナク。為ニ

諸方ニ衝突スルナリ。此ノ衝突ニ當ル所則チ震  
動甚タシク其上ニ建築スル百物顛覆スルニ至  
ル。或ハ曰クオッサトオリムピユス山ハ原来固着シク  
ルニ地震ニテ分割セルナリ。ペリニウス氏之ニ添  
テ曰ク最高ナルシボチユス山ハキユリテ市ト共ニ  
又マグネシアニ於ケルシビリユム。及タシタリス  
グロニシアニ於ケルガラニス。及ガマレス。モール  
ンランドニ於ケルニギウム。ムオチス湖ニ浴フ  
ビルラ及アンチサ。ヨリシセ海灣ニ於ケル。エ  
リセ。及ビユラハ何ニ由テ埋没セシヤ。エリセ。及ビ

ユラヲ。詩人カヒジウス氏詠スル所アリ。今羅甸  
文ヲ阿蘭語ニ譯スレハ左ノ如シ。

(富)

汝アカイア及エリセーシ。及ビユラノ何レノ  
憂ニ在ルヤヲ探索セハ。波浪上水中ニ之ヲ見  
出スヘシ。舟子ハ穩静ナル風ニ慣ル。造化ハ人  
民及家屋顛覆スルノ動搖ニ慣ル。  
バウサニアス氏曰ク。エリセ及ビユラハ。歷山王  
降誕前三十七年ニ沉没セリ。  
又地震ノ原因ヲ説ク諸家一ナラス。デモクラチ  
ユス氏謂ク。雨水地下ノ凹所ニ沉ミ。土ヲ膨脹セ

地震原因。

シム。其沸騰スル片地面ヲ擡起スルナリト。タレ  
スレシウス氏曰ク。土ヲ地上ニ投ケ上ケ。此時  
兼テ波浪ヲ震搖スルナリト。然レ氏正シキ理學  
家ノ説ニテハ。地震ハ地下空所ニ閉鎖スル氣ニ  
起ルトス。其漏孔閉塞スルノアレハ。氣漏洩スル  
ノ路ヲ索ム。抑モ其始土中ノ小孔ヨリ吸收シ。深  
ク浸入スル所ナルニ。今出ルニ由ナク。土ノ自ラ  
乾燥スルニ由ルカ。或ハ雨水ニテ濕潤スルニ由  
テ。多量ノ蒸氣ヲ發ス。蓋シ地下ノ溫熱。及地上ノ  
日熱。大ニ之ニ關係スルナリト。

地震種別。

此說ハアリストテレス氏數條ノ理由ヲ以テ保  
証スル所ナリ。凡ソ劇甚ナル地震ハ。穩和ナル天  
氣ニシテ。地下ノ風。凹所ニ閉鎖スル片ニアルナ  
リ。就中秋及春ニ於テ多風ノ時ニアリ。風強起ス  
レハ。地震則チ止ムナリ。山谷多キ地ニ地震多キ  
ナリ。以下原文缺損可惜。

地震ノ種類ヲ説クニ。亦諸家一ナラス。或ハ三種  
ト為スナリ。或ハ七種ナリト為スアリ。其三種ノ  
別ハ。一動搖。是恰モ舟ノ動搖スルカ如ク。地面  
彼此ニ動搖シテ。家屋ヲ倒スニ至ルナリ。二衝突。

是地面ヲ上騰スルナリ。則チ閉鎖スル所ノ地  
下ノ氣道ヲ上邊ニ求ムルニ出ル所ナリ。三地上  
ニ孔ヲ開キ。地面破裂シ。上面ノ地ハ沉没スルナ  
リト。然レハ。歷山王ニ屬スル世界紀事中ニハ。此  
三種ノ外更ニ四種ノ地震ヲ纂ス。曰ク相互ニ衝  
突スルノ震搖。破裂。地下鳴動。急速顛覆。是ナリ。  
地震。面連スルノ長短ハ。之ヲ歷驗スル所ニ據ル  
ニ。或ハ間歇シテ震搖スルアリ。或ハ休歇ナクシ  
テ。面連四十日ニ及ブアリ。是閉鎖スル所ノ氣ト  
地上ノ氣ト。厚薄稀稠平均ヲ得ントスルニ由ル

所ニテ。風ノ多少輕重ニ關係スルナリ。  
地震ノ前表各種アリ。其迎接スルニ方テハ空氣  
非常ニ靜謐トナル。蓋シ風ノ原素。地上ヨリ来ラ  
ス。地中ニ潜伏スルニ由ルナリ。又直聳シテ稀薄  
白色ナル雲片ヲ現ス。多クハ朗晴ノ日。日没ノ後  
豆ニアリ。天上風ナク。蒸氣アリテ。結テ雲トナリ。雲  
片氣中ニ游泳スルナリ。海水潮時ナラサルニ俄  
カニ高潮トナリ。井泉ヨリ臭氣アル塩水ヲ出ス  
等ナリ。プリニウ氏曰ク。ベラーシデス氏ハ希臘  
ノ博士ナリ。曾テ井水汲ム所大地震アリテ。其市

ノ沉没スヘキヲ預察シ之ヲラセテモニトルス  
ニ告ケタリ。又地下ノ昆虫。能ク預メ地震ヲ前知  
シ。群ヲ爲シテ速カニ遁亡スルナリ。又雲蔽ノ  
ニ非ス。太陽光ヲ失ヒ曇暗トナルナリ。  
地震ノ爲ニ被ルルノ損害。人ヲシテ冷膽。穀粟セ  
シム。其家屋。村落。市街。或ハ全城。埋没シテ墓地ト  
ナルヲ見ハ。誰カ夫レ恐懼セサランヤ。或ハ海中  
忽チ島嶼ヲ現出シ。或ハ山ヲ移シ。或ハ陸地水ニ  
固マレ。或ハ島嶼。陸地ニ接着シ。或ハ地上ノ孔ヨ  
リ火ヲ噴キ。硫黃ヲ吐キ。灰ヲ飛シ。砂土數里外ニ

飛散シ。海ヲ超テ田畝ヲ埋メ。川脉ヲ變シ。又震後  
腐敗風ノ為ニ。惡病流行スルヲアリ。是敗氣ノ空  
氣ヲ毒スルニ由ル。此ノ如キ悲酸ハ。日本人屢之  
ヲ嘗ムル所ナリ。

日本ノ不幸ヲ活潑ニ映鏡視セシムル為ニ。今ニ  
回大地震ノ状ヲ記ス。一ニ。其一ハ大畧百五十年  
前ボノニニニ於テスル者一ハ近年イルリソ  
ーニニ於テスル者ナリ。學士ヒリツプスベロア  
ルシユス氏千五百零五年ボノニニニ在留セ  
リ。十月ノ季永正十二年一夜十一時。非常ニ鳴動シテ恐ルヘ

ク地震スボノニニニ衆人皆驚起ス。忽チ見ル彼  
此ノ烟突。壁土。潰崩スルヲ。然レ地地面ニハ異ナ  
ル所ナシ。但シ三日後朝九時ト十時トノ間ニ於  
テ再ヒ震動シ。百物戸ニ衝當ス。地下旋回シ。地上  
震揺ス。大小ノ家屋傾頽シ。日暮再ヒ震動ス。ブリ  
ンスペインチホリノ邸ハ破壊ス。ヤコブニートル  
及フランシスキユムニ屬スル寺院ハ側壁ニ大  
隙孔ヲ開ケリ。櫓ハ多クハ倒ル。烟突存スル者ナ  
シ。既ニノ漸次ニ震揺減サス。然レ且連夜微動ア  
リ。故ニ夥多ノ人員。皆天幕ヲ張テ露宿スル一



月許。此時又熱病ニ罹ル者多シ。第二震後十五日ニ。又第三震アリ。共ニ夜間ニ於テシ。二十四日ノ後。僅カニ休止セリ。其災害言フ所ヲ知ラス。又ニトアルジユス氏曰ク。ヒユルキユスアルグランチス氏。此地震ノ為ニ醜容トナリタルハ。實ニ驚クニ堪メタリ。蓋シ屋倒レタルヲ以テ。勇ヲ奮テ窓ヨリ匍匐シ出ントスル時ニ。壓扁セラレテ喉ヲ損傷セルナリ。

○京

又近年ラゴウサニ於テ大震アリタリ。千六百六十七年四月六日。天氣快晴。穗和ナリ。朝九時ト十

時トノ間ニ於テ。卒然トシ一瞬間ニ。全市大震ス。ヨリスクローク氏。ラゴウサ某屋ノ上層ニ住セリ。其顛覆スルニ方テヤ。氏及妻ブレジカン。貴女小兒侍婢共ニ壓扁セラレヨコ。プファンダム氏ハ。阿蘭商會ヲ宰シテシムルナニ宿セリ。然レモ下層ニ在リ。此人他人ト共ニ石階下ニ潜ミ。僅カニ半身ヲ室ヨリ出サントスルニ方テ。三層倒レリ。暗黒ナルト雷鳴トニテ。為ス所ヲ知ラス。電光ニ乘シテ別室ニ入ル。是クローク氏住スルノ房ナリ。大邑ニ叫喚ス。而ルニ別人ノ人ヲ呼フカ如キ。

ヲ聞ク。然レ其誰タルヤ。悟ルヲナシ。故ニ破  
屋ニ在テ。天明ヲ待ツ。大渴堪可ラス。蓋シ暴風ノ  
為ニ崩潰スル所ノ壁土飛散。旋回スレハナリ。依  
テ他ニ出フ。然レ其亦危険ナキニアラス。何トナ  
レハ上ヨリハ大土塊墮落シ。又地面ハ各所破裂  
シタルアリ。又新クニ裂クルアレハナリ。全市忽  
チ百地獄トナルニ似タリ。則チ六人ヲ伴フテ壞  
屋ヲ超ヘ。大ニ辛苦シテラゴウサ外ニ出タリ。途  
中ニテ同伴ノ一人壓死セリ。但シ市外ニ出ルモ  
亦頗ル困苦ナリ。岩石ノ大碎片。途上及畝上ニア

リテ運歩ニ便ナラス。回顧スレハ市中各所火ヲ  
失シ。鮮熾中ニ在リ。又三個ノ火藥庫ノ今將ニ破  
裂スヘキヲ配慮ス。若シ破裂セハ遺存スルノ家  
屋悉ク粉碎スヘケレハナリ。而シテ地震及雷鳴。尚  
止マズ。屋外ニ在ル人ハ露天ニ在テ日夜飲食ヲ  
絶シタリ。健康ノ者少ナク。多クハ疲憊餓渴スル  
ノミ。幸ニ勿溺茶舟士港ニ在リ。一二ノ蒸餅ヲ  
惠施セリ。僅カニ餓ヲ凌クヲ得タリ。此舟士亦大  
危難ニ遇ヘリ。則チ海水退去スル。三四ニノ其  
港遠ニ乾涸シ。船ハ破碎シテ地罅ニ没シ。震搖甚

夕シ。既ニノ海水忽チ故ニ復シ。數千ノ船舶一時  
ニ海岸ニ衝突シタリ。苦痛ト餓餓トノ為ニ斃ル  
者頗ル多シ。又或ハ傾キタル柱梁ニ挟マリ。壞レ  
タル壁ニ壓サレ。大金ヲ擲ツニ非サレハ。他人顧  
テ之ヲ援フニ暇アラズ。フシダムハ船内ニ在リ  
タルニ大危難ニ遇ヘリ。但シ近傍ニアル火薬庫  
破裂シタレハナリ。四月八日。三百人ノ土耳其人  
及モールラツケン。馬及騾ニ乘テ。ラゴウサニ来  
リタリ。郭門ニ於テ一二之ヲ支障スル者アルヲ  
見テ。則チ劍及銃ヲ以テ。開キ進入ス。婦人ハ走テ

港ニ向ヘ。男子ハ殺サレ。盜賊横行シ。乱妨頗ル甚  
タシ。第六日ニ至テ地震稍穏静トナル。是ニ於テ  
フシダム氏ハ。自ラ市ニ入り。倉庫ヲ檢セントセ  
リ。然ルニ更ニ悲歎スヘキトアリ。何トナレハ地  
震ハ稍緩トナリタレ。尙未タ止マズ。火勢滅セ  
ズ。市中盜賊横行シ。路上屍体充滿シ。或ハ血中ニ  
没スルアリ。或ハ半焼スルアリ。臭氣鼻ヲ撲ツフ  
ハンダム氏。則チ衆人ヲ使役シ。貨賤ヲ瓦礫中ヨ  
リ掘リ出シ。約スルニ一半ヲ興フルヲ以テシタ  
ルニ。多人勞カスル。一日ニ及ヒタレ。瓦礫夥

シキカ故ニ得ル所甚クサナク旁カヲ償フニ足  
ラス。依テ此事ヲ止ノリ。抑モ全市六千人中。生ヲ  
存スル者僅カニ五百人ニ過キス。而シテ千六百人  
ハ焼死セルナリ。

阿蘭使節アリシウス氏。及ブルトクホルスト氏。

〔再〕日本旅行ニ説キ及フヘシ。小田原ニ一泊シ。  
舊城沈没ノ痕。新城建築ノ状ヲ一見シ。十二月三  
十日。敦條ノ川ヲ經テ。ヘドヲ過テ。大磯ニ至リ。馬  
入川。及相模川ヲ見ル。共ニ舟渡シナリ。平塚。馬入  
田村。及藤澤ヲ過ク。

